英国春秋

２０１７年　　春号
ISSUE NO ３０
発行　英国日本人会

はじめに

好きな言葉の一つに春爛漫と言うのがあります。一面に広がる花の海、遠くの方はそれこそ霞か雲か見分けがつかないくらい・・・という情景が浮かんできます。やはりそこは吉野山でしょうね。何となく暖かい風が頬を撫ぜるようです。
それと百花繚乱と言うのもいいですね。これは色とりどりの花々が咲き乱れる原生花園など思い浮かべてしまいますので、どちらかと云えばもう少し遅い時期、晩春から初夏にかけての頃でしょうか。

もう何十年も昔の話になりますが、丁度今頃、新しいランドセルを背負って待ち焦がれた小学校に入学しました。そして初めて手にした国語の教科書の第一ページは今でもよく覚えています。
「みんな　いい子、なかよしこよし、　みんな　いい子
　みんな　いい子、おはなをかざろう　みんな　いい子」
そして、「みーんな　**いいこ　おはなをかざろう**　みーんな　**いいこ**」と節をつけて合唱したものです。

少し前までの教科書は、「サイタ　サイタ　サクラガ　サイタ」、と文字は全てカタカナ表記であったそうです。これだとまるで電文のようで、何となく味気がないようにも思えますが・・・。今、電文と云う言葉を使ってしまいましたが、最近の若者たちは電報などという代物は全く知らないことでしょう。

一年生の教科書で、「お花を飾ろう」と言うのが、いらい心に焼きついたようで、子供の頃から花を飾るのが好きでした。最近は時間があるので、各部屋に飾っています。歳と共に頑固になってきたのか、どなたとも“仲良しこよし”は難しいようですが、少なくとも花に関してはいつまでも“いい子”でありたいものです。

春号の特集は『私の好きな本』で、興味深いエッセイを数点送っていただきました。
ジャーナリストだから書けたミステリー作家の内幕ご披露。何事にも綿密な“投資プラン”が必要であることをまざまざと実感させられる内容。次に、現役文筆家の読書遍歴ご披露。将来、この筆者の「伝記」が出版される際は、『英国春秋』より参考文献として“読書歴”についての項は協力惜しまずというところでしょうか。そして“血沸き肉躍る”カニバリズム小説の登場。この稿を読んだ後でもレバー料理を食べられる人は大物ですね。そして「あなたが一番好き！」と云えない多情・多感な博愛主義のビブリオファイルの告白などと、豊富な内容の作品が集まりました。

『英国春秋』２０１７年春号が完成しました。今回で丸い数字の３０号です。昨年の暮れ、英国日本人会は創立２０周年を祝いました。スタート以来２～３年の休刊はありましたが、年２回の発行を続けながら JA 文集部として歩んできました。これをなし得たのもひとえに、会員及びゲスト・ライターの皆様が原稿を送って下さったからこそ出来たものと、心より感謝しております。今後とも引続き皆様よりのご支援をよろしくお願いいたします。

特別寄稿

マークス寿子氏　（文筆家・元秀明大学教授・元エセックス大学講師）

鶴岡公二氏　（在英国日本国特命全権大使）

（アイウエオ順）

＊　＊　＊　もくじ　＊　＊　＊

はじめに
ミステリー小説　加藤節雄　４
私の好きな小説達　ビドル惠　５～　７
私の読書人生　マークス寿子　８～　９
英国春秋歌壇　大和の歌を　バロー典子　１０
英国春秋俳壇　旅を往く　ホジソン美智子　１１
イギリスのセレブ達「ロニーとバスター」
「クリスヒューンの栄光と凋落」　石山望　１２～１４
想い出に残る人たち　田村陽子　１５～１６
私流ＩＴ時代の楽しみ　古川隆　１６～１７
英国春秋つれづれに　燕百話　１８
「私の好きな本」を考えることについて　渡邊伸吾　１９
マニラの思い出　鶴岡公二　２０～２１
菜の花の沖　メータ美知子　２１～２２
英国春秋俳壇　寒バラ　エリオットつやこ　２３
巡礼の旅　ローマ、サンチャゴ・デ・コンポステラ、エルサレム　小川のり子　２４～２６
ミケランジェロ・アントニオーニとイングマル・ベルイマン　渡邊道英　２７
私の憧憬して止まない詩　オハロラン松尾美和子　２８～２９
英国春秋俳壇　春愁い　クーパー　矩子　３０
英国春秋俳壇　俳句同好会　３１
焼き鳥屋修業　早乙女健之　３２～３４
英国春秋あれこれ　赤い靴　３４～３５

ミステリー小説

加藤節雄

私の仕事の中には日本の作家たちと一緒に行動するという仕事が結構ある。推理小説のための取材旅行だったり、ドキュメンタリー小説の追跡調査だったり、雑誌の特集記事のための旅行記だったりと、内容はまちまちだがそれなりに苦労することが多い。中でもミステリー作家の夏樹静子さんとの取材旅行は今でも大変印象に残っている。

夏樹静子さんとは、マンチェスターを中心としたミドランド地方で起こった殺人事件の推理小説の取材のために 1 週間ほどご一緒した。ロンドンに事務所のある日系商社の駐在員が取引先の英国人女性社長に恋をしてしまう。マンチェスター郊外のホテルでは彼女の会社のマネージャーが殺されるという事件が起こる。女性社長の過去が浮かびあがり、彼女が疑われる。
このスケールの大きい小説のため、私はロンドンでレンタカーを借り、夏樹さんを乗せて、ミドランドへ行きストークやマンチェスター、ブラックプール、リーズなどを走り回った。彼女の頭の中にはすでにラフなプロットは出来上がっており、それが具体的に可能かどうか、また、そのプロットに適した場所や建物を探すのが私の仕事だった。

ロンドンでの 2 日間の調査を終えてから、M1 高速道路に乗り、ノースハンプトンを過ぎたところで M6 高速道路に乗り換え、先ずストーク・オン・トレントまで走った。車中彼女は私にいろいろな質問をしながら、大学ノートに主な場所の通過時間を書いている。風景に関しても細かくメモを取っている。すべてがこの調子で。取材が終わるころには大学ノートが 7 冊になっていた。
殺人事件が起こるホテルは、マンチェスター郊外にあり、部屋はメインの建物から離れたアネックスで、庭に面していることが条件となった。観光局や土地の人に訪ねて条件に合う格好のホテルを探したり、また、部屋で殺人事件が起こった際にはホテル側はどう対処するのかを聞き出し、それから近くの警察に行って、この種の殺人事件の際には何人ぐらい動員するのかとか、初動調査から広域調査に至る過程を教えてもらい、その際の警官の役職名や警官や警部の移動手段、連絡方法等、かなりきめの細かい調査をした。

ミステリー小説家がつくづく大変だと思ったのは、ストーリーに無理や虚構、不可能なことがないように気を使わなければならないことだ。頭がよほど緻密でないと出来ない技だ。よく列車の時刻表から、犯人が乗り継ぎをうまく利用してアリバイを作るという手法を使う小説が多いが、これなどもかなり頭が精巧でないと無理な話で、私には到底出来そうもない。
この取材旅行中を通して、私は夏樹さんから日本の駐在員が使う車の車種や、どこで、どんな家の住むのか、週末はどうやって過ごしているのか、お客を接待するときにはどんなレストランやクラブに行くのか、ロンドンからマンチェスターに行くにはどの高速道路を使うのか、ブラックプールのナイトクラブで踊るダンサーの女の子はどの地方の出身の子が多いのか、家は貧しいのか、それとも好きで踊っているのか、等々、ありとあらゆる質問攻めにあった。それだけ正確を期す性格なのだろうと思うが、もしとんちんかんなことを書けば、「この作家は分かっていない」とか、「手抜きをしている」と批判されるからだろうと思われる。

大体こういった取材は最初面倒くさいとか、なんでこんな細かいことを聞くのだろうとか思いがちだが、そのうちに自分も興味を持つようになり、のめり込んで作家と一緒に作品を作っているという感覚になり、自らいろいろと探し出したり、あっちこっち作家を引っ張りまわしたりすることが多くなる。大変だが、やりがいのある仕事でもある。
※この取材旅行は「わが郷愁のマリアンヌ」(角川書店)として出版されている。

私の好きな小説達

ビドル　　惠

絵を描くこと一辺倒だった私に、読書の愉しみが加わったのは、足寄町に公民館が建てられ、それに付属して図書館がオープンした時からなので、1966 年。私が小学校の五年生の頃である。初めはクラスの友人に連れて行ってもらい、本の借り出しの仕方を覚えてからは三日に空けず通い詰め、私はすっかり本の虜になってしまった。

ずらりと並んだ本の中のどれが面白いのか、何も知らなかったので“世界少年少女文学全集”辺りから読み始め、後は手当たり次第。と言っても選ぶ基本に、挿し絵が美しいことを、第一条件にしていたと思う（単純ですみません）。別に挿し絵が色付きでなければという訳で無く、白黒のペン画のイラストでも“不思議の国のアリス”の様な独特の美しさを持ったものに惹かれた。そして、どちらかと言うと、王子様やお姫様が登場するロマンティックなものより、グリムやハンス.クリスチャン.アンダーセン、フランシス.H.バーネット、そしてディケンズと、ちょっと暗くて、悲しい方が好きだった。そして自分の手元において置きたい程気に入った話しは、空で覚えてしまい、後で綺麗に清書して挿し絵も自分で描き、私だけの本を作ったりした。

授業のひとつとして先生の引率付きで観た、文部省選定映画“フランダースの犬”は、必至に絵を描くネロに自分が重なり、悲しさと、ルーベンスの壁画の美しさに感動して、その後直ぐ図書館で読みあさった本だ（登場するフランダース犬、パトラッシュのイラストが、本に依ってはコリーだったりマスチーフだったりして、不満やる方なかったけれど、1998 年にワーナーブラザーズのリメイク映画で、やっとブービエ.デ.フランダース犬を登場させてくれたのは嬉しかった）。

学生時代や社会人になって、自分の本を買えるようになってからは、小説（物語）からちょっと離れ、イラストの勉強の為の実用書や写真集、手芸や工作の本、読む方はエッセイ集や歴史、実録ものに凝った時期が有ったが、今は又小説に戻っている。ジャンルは特に限らず、SF から推理小説、スリラー、ホラー何でも読むが、この頃は、人情味あふれる江戸時代の市井もの（平岩弓枝、藤沢周平、宮部みゆき、山本一力）や、登場人物の生き方、心の動きに焦点をあてた繁盛記もの（宮尾登美子）などが好きである。そして勿論その作家のエッセイも読む。

又、映画（特に洋画）が好きなので、気に入った作品の原作も必ず読む事にしている。先ず翻訳版を探し、手に入らない時は英語版で我慢（時間がかかりましてね～ ベットタイムに読むと 2 ページも進まないうちに睡魔に襲われてダウンです）。

スティーブン.キングの“グリーン.マイル”や“ドロレス.クレイボーン”、カズオ.イシグロの“日の名残り”、ジェフリー.アーチャーの“ケインとアベル”。心の中がほのぼのと温まる、テリー.ケイの“白い犬とワルツを”など。あっファニー.フラッグの“フライド.グリーントマト”もいいなぁ～と、ここまで書いてふと気が付いたのは、私が好きで選ぶものの中には必ずと言って良い程、食べ物が登場するという事（食いしん坊ですみません）。話が超フィクション過ぎて、登場人物が一切、眠らず、喰わず、バスルームにも行かない冒険アクションものや（007 シリーズは最たるものだ）純愛小説などは、読んでみようかなという気になれないのである。

遡ってみれば、飢えと寒さをマッチを擦って凌ぐ“マッチ売りの少女”から始まり、屋根裏部屋で、温かいスープや御馳走を本当に食べているんだと想像して、寒さを忘れようとする“小公女セーラ”。パトラッシュにあげてと貰った骨を、まずスープに煮出して分かち合うネロとお祖父さん。何か物を食べたり飲んだりする度に、体の大きさが変わってしまうアリス、という具合に食べ物の登場する箇所が必ず有る。

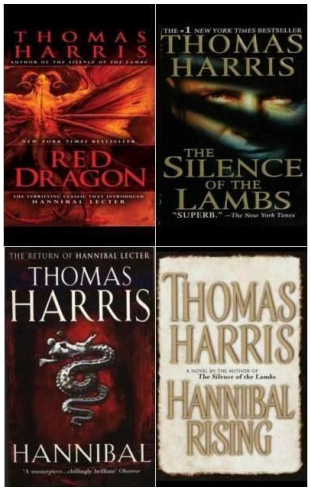
市井ものは、暮らしの中の食べ物を語らずしては成り立たないし、日々の倹しい生活の中で、四季の折々に食卓に上る食べ物を、さり気なく描く事で有名な宮尾登美子の作品は、何度読み返しても飽きる事がない。例えば、傷みの速い楊梅を食べるところから始まる“櫂”や、土佐ではまいごと呼ばれる小さな貝（ウィンクルか？）を、楊枝でせせり出して食べるシーンが印象的な“鬼龍院花子の生涯”。“序の舞”に登場する壬生菜とお揚げの炊いたんは、是非一度食べてみたいと願っている料理の一つだ。

洋書の方では“グリーン.マイル”の死刑囚、ジョン.コフィーが最後の食事に所望するミートローフにローストポテトとオクラ。E ブロック主任、ポール.エッジコムの夫人が作るコーンブレッドからは、出来立ての香りが立ち登るし、“白い犬とワルツを”では主人公が、亡き妻のビスケットを自分で焼いてみようと奮闘するシーンが可笑しくもあり、且つホロリとさせられる。“フライド.グリーントマト”の舞台である、ホイッスルストップ.カフェのメニューには、パン粉をまぶしたグリーントマトのフライを始め、アメリカ南部の古き良き時代の料理の数々が登場し、生唾を飲み下しながら読んで行く事になる。

食べるという事は、どんな人にも何かこだわりがあったり、思い出があったりするもので、小説の中にさり気なく書かれている食べ物に、作家の心や生き方までも反映されているのではないかー と、いっそう興味をそそられるのだ（そういった訳で、食べ物の話がてんこ盛りのエッセイ、東海林さだおの“丸かじりシリーズ”は大好きである）。

これは余談だが、私は折ある毎に以前読んだものを引っ張り出しては、牛が牧草を反芻する様に読み返すのが好きなので、買い集めた本を始末する事が出来ず、沢山の本に囲まれた暮らしである（キンドルやアイパッド系の収集が楽な方を進められるが、画面を見ていると目がチカチカして疲れるので、実物の本の方がやはり良い）。本の中に居るとすごく落ち着くのだが、とうとうこの本の山は私の部屋をはみ出て、居間、寝室、トイレ、果ては階段の踊り場まで侵食して行き（これは夫も同じなので家中が）いつか本の重みに家が耐えられず、崩れて二人共生き埋めになるのでは、と危惧している。

さて、そうした数々の本の中から「どれが一番好きか？」と聞かれると、好きなものが沢山あり過ぎて迷い本当に困ってしまう。その挙句にやっと落ち着くのがトマス.ハリスの“ハンニバル.シリーズ”か。トマス.ハリスは 1940 年テネシー州生まれ。テキサス州ウェイコのベイラー大学生時代から、トリビューン.ヘラルド紙で犯罪事件の記事を書き、後にニューヨークで AP 通信社のリポーター、編集者として活躍したベテラン記者。1975 年に“ブラック.サンデー”でデビューした後 、“レッド.ドラゴン”（1981 年）と“羊たちの沈黙”（1988 年）が超話題作となり、この僅か三冊の出版で、サイコ.スリラーの分野を確立した作家である。



ハンニバル.シリーズの第一作“レッド.ドラゴン”と第二作の“羊たちの沈黙”は映画を見た後で、翻訳版を読んだ。ある凶悪な連続殺人犯を FBI が追い詰めて行く話で、プロファイリングという科学的な犯罪調査が精妙に描かれるという斬新さが、この作家ならではのものだった。第三作の“ハンニバル”(1999 年)は、出版されるのを心待ちしていたので、英語版が先だった。壮絶な復讐劇やサスペンスの連続で、説話調の簡単な文章に助けられて読破する事が出来（フィレンツェが舞台になっているので、建物の名前などの予備知識が必要だが)、その後映画を見た。監督は巨匠リドリー.スコットで、物語のベースに（場面が変わる毎に）流れる音楽とフィレンツェの街並みが美しかった。

この作品を一番に選ぶ理由として、先ずシリーズに一貫して登場する精神病医で、反社会的精神病質者である、ハンニバル.レクター博士の圧倒的な存在感が挙げられる（映画化されて、アンソニー.ホプキンズが見事にこの優雅な怪物を演じた)。

彼の嗜好、ときに触れて奏でる音楽（ハープシコードで奏でられるバッハのアリア.ダカーポ、ゴールドバーグ.バリエーションは、せつない程美しい）や車の趣味。彼が折ふしこもる“記憶の宮殿”、好みのワインや、選び抜かれた食材と用具を用い、プロをも凌ぐ腕前で作る料理。その上、彼の家系や生い立ちに至るまで“怪物”の人間味を細やかに描いていくトマス.ハリスの語り口に、ハンニバルに対す

る著者の愛着すら感じられ、読んでいくうちにどんどん引き込まれて行く。

そしてその洗練された美しさの奥に、人肉嗜好（カニバリズム）という怖ろしい行為が潜んでいるのにも魅せられてしまうのだ（“フライド.グリーントマト”の中にも、親友の暴夫フランクをバーベキューにしてしまい、ホィッスルストップ.カフェで出すというくだりがある）。

シリーズを通して繰り広げられるハンニバルの人肉嗜好行為は、最愛の妹ミーシャを喰らった仇敵に復習した時から。頬肉（オイスター）をシシカバブにして賞味し、単に殺す事を目的とする鹿の密猟者からは、脊椎下部の両側にあるフィレ肉を削ぎ取っている。演奏を間違えたフルート奏者からは、胸腺（スイートブレッド）を（その為、ミュージシャンの間では演奏をとちると、ハンニバル.レクターに食べられるぞ、というジョークが流行った）、クラリス.スターリングを陥れた FBI 司法省のポール.クレンドラーに至っては、生きたままの状態で、前頭葉の一部を切り取られるという目にあう。

どうしてこのような怪物が誕生したのか、その謎を解き明かすのが第四作の“ハンニバル.ライジング”（2006 年）だ。第二次世界大戦終結直後のリトアニアから逃亡した、13 歳のハンニバル.レクターは心身に負った傷が癒えぬまま、フランスで彼の亡き叔父の妻、紫夫人（元・日本大使の娘）に保護される。ハンニバルは、反キリスト教的無神論者という設定であるから、その若者が成長期に培う教養の素地として、トマス.ハリスはキリスト教の文明とは一切無縁で、歴史的深みと一貫性を持つ日本の伝統に着目したのではないかと思う。紫夫人を通してハンニバルは、風雅を愛でる心を養い、時には日本語を操り、俳句を詠み、生け花、茶道、水墨画、折り紙などの日本文化の粋を身に付ける（そういった面で、ハンニバル.ライジングを一番楽しみながら読めるのは、我々日本人だと言える）。そして、夫人の料理人から美食と調理法も学んで行く。

勿論、ハンニバルの心の中には、雅な教養に依っても、紫夫人の愛に依っても、宥められないない復讐心が潜んでおり、かつて無意識に封印した記憶の扉を開けて、復習の道を進むのだが、最後に仇敵が放った毒は ハンニバルにとって最大の衝撃となり、“真実の瞬間”を経て彼は“怪物”となる（詳しくは是非本書をお読みください）。

食いしん坊の私が、このハンニバル.シリーズで背筋がゾクゾクする程好きな場面は、第三作“ハンニバル”の下巻 100 章、ハンニバルとクラリスの晩餐シーン。

概要すると、クリーム色のナプキンと、クリスタルや銀器にロウソクの火が映える、居心地の良いダイニングテーブル。ハンニバルは鍋やコンロ、調味料の載った給仕用のワゴンをテーブルの横まで押して来ると、テーブルフラワーの向こうに座る、ポール.クレンドラーの前頭葉を四切れ掬い取る。

新鮮な脳髄は、先ずレモン汁の酸味を加えた冷水に浸して固めてから、スパイスの混ざった小麦粉と、ブリオッシュのパン粉をまぶしてさっと炒められる。ノアゼットにされたバターとエシャロット、微塵切りのケッパーに黒トリュフ、少量のレモン汁を加えて作ったソースをかけ、付け合わせは、パセリと茎付きのケッパー、そしてクレソンが添えられる… と読んでいくうちに、人に依ってはもの凄い嫌悪に囚われるか？ そこに一緒に座って賞味してみたい衝動に駆られるか？

私は後者の方で、キツネ色に焦がしたバターに投じられた、エシャロットの香りが強烈に立ち登り、もうそこには“人間の脳髄”という意識が無くなってしまい、食材としての脳髄があるのみだ。中近東の方に羊の脳髄の料理があるそうだが、私は未だ食べた事が無く、どんな味がするのか興味津々。料理本に依ると、食感としては魚の白子、それも、一番と言われる河豚の白子に味も近いとか、なんとなく想像が出来そうだ。イギリスで手に入る食材としては、鰊の白子が挙げられるが、上記の調理法で美味しくいただけそうである（これが鱈の白子だったら、外観まで似ているので、人をドキリとさせられるかもしれない）。

ハンニバル.シリーズは“ハンニバル”で終末論的な結末になるが、その後書かれた“ハンニバル.ライジング”では、描き切れない怪物の秘密が残されており（初原稿の段階でタイトルは、ハンニバル.バリエーションだったそうだ）、私はハンニバル.シリーズがまだまだ続くのではないかと、トマス.ハリスの今後を期待している。

私の読書人生

マークス寿子

好きな本を１冊、或は 10 冊でも、選べと言われたら、それは無理ですとしか言いようがない。本と名が付けば何でも好き、取りあえず何でも読んでみるからだ。長い？一生で、一番熱心にやったことは「読書」だったと言ってもいい。４/５歳の頃から 81 歳の現在まで、本を見ないで過ごす日は殆どないと言っていいだろう。

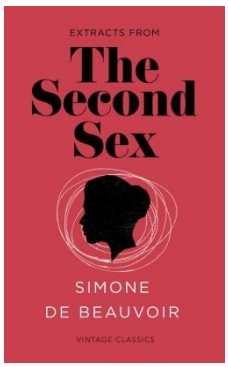
カタカナが読めるようになった頃から、母が取っていた婦人雑誌の頁を繰って遊んでいた。勿論、読んでいたのではないが、字や写真が出ているのが面白かったのであった。小学校（当時は国民学校）へ上がると、桃太郎や浦島太郎などのおとぎ話の本を買って貰って読んだが、そういうお話が大好きだったとは思わない。それよりも、戦争がひどくなって、父の郷里の山梨県に疎開して、学校の先生をしている父兄を持つ友達から借りた『クオレ』『巌窟王』『アンデルセン童話集』などに夢中になった。それらは戦前に出版された世界少年少女文学全集の本であり、当時そのような本を所有しているのは学校の先生だけだった。

小学校上級になると、科学や地理や歴史に興味が出て来て、読むものも星座に関する雑誌や、ピラミッドや万里の長城やパナマ運河の建設のことを解説した本を読んだ。キュリー夫人の伝記を読んで感激したのもこの頃である。

友達の家の本を読みつくしてしまうと、我が家の天井裏に、叔父たちが読んだ本が積まれているのを見つけて手あたり次第読んだ。漱石全集の中から『坊ちゃん』『草枕』『三四郎』などを読んだが、読んで分かったとは敢えて言わないほうがいいだろう。中学校では図書室にかなりの本が揃っていたから、春や夏の長い休みには必ず大きい本を借り出して読んだ。この頃には、何を読みたいかが分かるようになっていて、外国の小説が面白かった。スタンダールの『赤と黒』、トルストイの『アンナ・カレーニナ』などを暑い夏の午後に涼しい木陰で毎日読みふけったものである。その一方で、この頃兄が熱心に読んでいた宮沢賢治を私も読んだ。宮沢賢治は外国のわくわくする長編小説とは全く異なっていて、その背景を理解するのは決して容易ではなかったが、ファンタジーとしてよりも人間の悲しみを表現している文学として胸に残ったように思う。

私の親の教育方針は「女子に読書は必要ない。それどころか害になる」というものであって、私が本に夢中になるのを苦々しく思っていた。それ故、私の読書は親に隠れてしなければならなかった。父は会社の仕事でほぼ毎日帰宅は真夜中になったし、母は父が戻るまで寝床で休んでいることが多かったから、私が学校の勉強と称して好きな小説に読みふけっていても、誰も知ることはなかった。

高校では、文学好きな国語の先生の指導で、初めて万葉集や古今・新古今集を読んだ。そこから進んで萩原朔太郎や室生犀星のような現代詩人の作品も読むようになった。しかし、何といっても私の読書人生での大事件はシモーヌ・ド・ボーボワールの『第二の性』との出会いである。読書だけではなく、幼い頃から「女の子は女の子らしく」という親の教育や躾けの全てに反発していたのであったから、後のウーマンリブ、フェミニズムの基本ともいえる『第二の性』の訳書が出たときには、小遣いを貯めて買った（全部で４巻あった）。何しろ、「女らしさとは神話である」と宣言し、「男女の差は文化によって作り出されたものである」というのであるから、私にとってはこれ程共鳴できる“有難い”本はなかった。今では全く当たり前の男女平等・同権が広く社会的に（法的にではなく）認められていなかった頃の日本であった。（日本だけではなかった。）



『第二の性』は難しい哲学書であり、それだけ読んで楽しい本ではなかったから、他にもいろいろな本を学校の図書室から借りて読んだ。ヘルマン・ヘッセや、ジェーン・オースティンやブロンテ姉妹が新しい発見だったが、最も夢中で読んだのはマルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』だった。これも長い小説で、一人の男子が次第に成長して社会に参加していく姿を丁寧に描写していて飽きることがな

かった。今でももう一度読んでみたいと思わないではないが、これまでその機会はなくて、今では本そのものが忘れられてしまったようである。

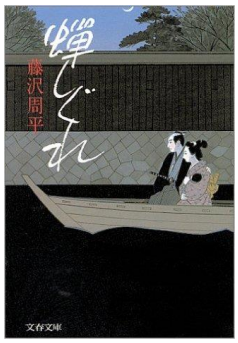
大学に入ると、楽しみの読書よりも勉強のため、研究のための読書が多くなった。バイトや学生運動や、仲間との付き合いや、その頃全盛期であった「映画」という楽しみなどに時間を取られることも多くなって長い小説をゆっくり読んでいる時間がなくなった。政治学、特に国際関係論を専攻したから、日本の近・現代史に関係する書物を多く読んだが、理論書よりも政治家の伝記、国際問題に関するルポルタージュなどは小説以上に面白く、報道関係の仕事をしたいと希望したが、当時女性の新聞記者は家庭欄と料理記事だけを担当させられると聞かされて希望を変更した。

大学院での専門研究では外国語の書物を読むことが必要となったし、さらに、先生方の指導のもとで日本の明治以降の政治家の伝記や日記、手紙を読んで議論する“史料研究”をしたから、学問とはこんなに“活き活き”としたものかという発見につながった。

大学院終了後、ロンドン大学の LSE（London School of Economics）に招かれて、そこで国際問題の研究をしたが、一番力を入れたのは公文書館での史料読みだった。同時に、英国は伝記文学の宝庫と言ってもよかったから、政治家だけでなく様々な人の伝記があって魅了された。日本では「伝記」はしばしば形式的な、誉め言葉だけを連ねた退屈なものであるが、英国の伝記文学はまるで暴露記事のように飾りのない、その人（政治家であれ、芸術家であれ）の人間性を抉るものが多くて面白かった。

結婚後、何年間か外での仕事はしなかったから、本を読む時間は十分にあった。そこで、源氏物語、平家物語などから始めて、樋口一葉、さらに円地文子、芝木好子などを読んだ。一作家の一作品を読んで気に入ると、手に入るかぎりその作家の全ての作品を読むのは私の読書態度である。この頃、日本の女性作家の作品を集中的に読んだのは日本への懐かしさと共に、女性が自由に生きられなかった時代に、それでも羽搏こうとした女性を主人公にした作品に共感したからであったろう。その気持ちとは別に、その頃読んだ数多くの日本文学作品が、後にイギリスの大学で日本語を教えるようになった時、大いに役立った。私は日本語を学ぶ人々が文法を暗記するだけでなく、素晴らしい日本文学の香りをも感じて欲しいと考えて教材を作ったり教えたりしていたからである。

作家として自分が作品を書くようになると、資料収集のための読書が多くなった。いい本、悪い本というよりも、何かで役に立つと思われる本は日本か外国かを問わず何でも読んだ。さらに、事実を知るための出版物や新聞雑誌の類にも手当たり次第目を通した。今も本を書いたり、書こうとしたり、雑誌に記事を載せたりしているからその資料読みに忙しいことには変わりはない。毎日 3/4 種類の新聞を読むのにはかなりの時間がかかる。特にイギリスの週末の新聞は頁数も多いし、面白い記事も多いから大変である。



とは言うものの、“勤務”という形の仕事がなくなって、自分の好きに仕事ができるようになって、さらに怪我や病気という有難くない故障が起きて否応なしに“楽しみの読書”の習慣を取り戻した。そんな時に読むのはもっぱらミステリー、刑事もの、スパイものである。

ジョン・ル・カレやフレデリック・フォーサイスは大好きな作家であるが、常に目を配って、いい作品、面白い作品を書く新しい作家の発見に努めている。勿論、イギリスの作家・作品だけではない。目下、仕事を終えるや否や飛びついて読むのは、藤沢周平である。古い作家であるが、私にとっては新しい作家である。私もよく知っている東京（江戸）の下町が舞台で、歯切れのいい下町言葉で会話がなされ、ハードボイルドと言っていいような立ち回りのある捕物帳は読了するのが惜しいくらいである。

最後に日本協会の部会の一つ、Book club も今の私の読書のために欠かせない“場”である。1 か月に一度、日本文学の英訳本を読んで感想を述べあう。会員の多くはイギリス人など外国人であるが、日本語のできる人、日本に滞在したことのある人も多い。日本映画が好きだけれど、日本へ行ったことはないなどという人もいる。これら外国人が見た「日本」「日本文学」は私が考えるものとは全く異なっていたり、思いがけない発想があったりして毎月の読書会が楽しみである。

ゲームやアニメのない時代、それどころかテレビさへもなかった時代に育って、読書は唯一の楽しみだったが、そんな時代に育って本当に良かったと思うこの頃である。

英国春秋歌壇

バロー典子

大和の歌を

外国(とつくに)に　住めば心の　琴なりて
　　大和の歌を　自ずと奏でる

着物着て　年の初めを　祝うとき
　　繋がりてあり　人と故郷

裸木の　冬芽に宿る　水玉に
　　光の射して　冬の花咲く

霜の朝　芝生を踏めば　サクサクと
　　一歩一歩の　音の好ましし

朝霧の　消えて現わる　寒桜
　　心の霧も　消えて見ており

夜に死して　朝に生かされ
　　千万の生死を越えて　今ある命

ロンドンは　見知らぬ人が　微笑みて
　　270 カ国の　人の住む都市

夕暮の　エンバンクメント　歩むとき
　　ウイスラーの絵　そのままうかぶ

定刻に　わが家の垣根　渡りゆく
　　リスの姿が　今朝まだ見えず

“子は宝”　言いて育てて　下さりし
　　亡き母恋し　有難かりき

玉の緒の　残りの丈は　知らねども
　　今日のひと日を　笑みて過さむ

英国春秋俳壇

旅を往く
ー　ペルーの旅　ー

ホジソン　美智子

若き日の夢を叶えむ古希の旅

旅を往くリュック ジーンズ スニーカー

夜間飛行アマゾン上空闇の中

車窓よりアンデスの峰見えかくれ

谷あいのインカの村で時止まる

子を背負うインカ衣装の人形買う

コンドルや翼広げて三メートル

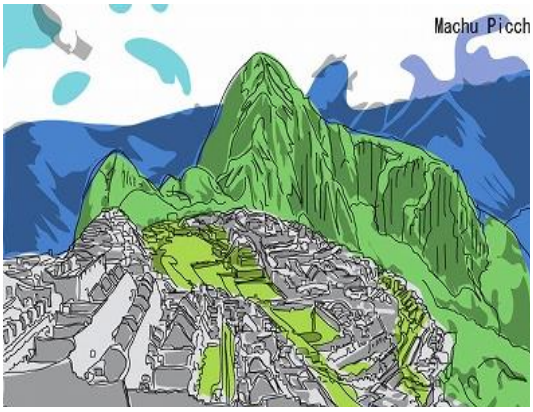
コンドルを見上げる吾に“El condor pasa”

あえぎ来て天空の都市現るる

マチュピチュや古代インカの夢の跡

旅の果て見上げる空は星月夜

ハチドリの花に戯るリマの午後



イギリスのセレブ達

石山望

「ロニーとバスター」

英国では、犯罪者を、場合によってはそれ程憎まないところがある。

1963 年 8 月 7 日未明、ロンドンからグラスゴーに向かう郵政省の貨物列車が 10 数名の何者かに襲われ、その一輌に積まれていた260万ポンド(現行64億円相当)の現金が強奪された。
これが今も尚英国犯罪史上最大の強奪事件として語り継がれる「列車大強盗事件」である。

明らかに内部事情に通じたものの仕業。信号を事前に「いじくる」など、実に用意周到にして「見事な」仕事と言えるかもしれない。残念なことに、その列車の運転手は、鉄棒で頭部を殴られ、事件後一度も仕事に復帰できないまま、数年後に非業の死を遂げた。

たいていのギャングはまもなく捕まったが、現金そのものは精々4 分の一程しか返ってこなかった。ただ、それらの札は小さな金高の古紙幣ばかり、焼却炉に向かう途中の出来事であったという。
捕まったメンバーのうちの何人かは後に脱獄に成功した。

ロニービッグズはその中でも最もよく知られた男。この国で彼の名前を知らない人はまずいない。もっと言えば、実にこのロニーが居るために、「列車大強盗事件」は、今も尚人々の記憶に生き続けている、といっても過言ではない。ロニーは、脱獄に成功した後、パリに移り顔を整形修正、次にオーストラリアに渡る。そして最後にはブラジルに入国、ブラジル女性との間に男の子をもうける。英伯間に、犯罪者送還の相互協定がないことをいいことに、リオデジャネイロで、いわば「有名人」としての生活を、憚るところなく欲しいままにした。新聞社の取材にも喜んで応じたが、その前に勿論値段交渉することを忘れなかった。
然し、近年持ち金が底を突き、身体の具合も目に見えて落ちてきた。そこで、ロニーは英国に帰ることにした。ただ、そこはロニーのこと、したたかな計算があっての上である。

勿論、英国に帰れば、即刻空港で逮捕される。然し、それこそ正に彼の思うつぼ、。逮捕してくれる、。逮捕されるといっても、刑務所そのものに行くのではない。その中の病院に行くのである。福祉国家の英国のこと、犯罪者といえども、最大限の治療を無料で施してくれる、。悪知恵にかけては、殆んど右に出るものがないロニービッグズは、英国官憲を手玉に取った。ブラジルからの護送便は、何とある新聞社がチャーターしてくれた。

人生の殆んどを、法に背いてばかりすごしたロニー、都合が悪くなると、それを逆手に取って、利用した。そんなロニーの一生も、最後の幕を閉じようとしている。余命幾ばくもないという。
その時、これまで、散々彼にいいように弄ばれた英国の法務省は、ロニーを「温情で」釈放することにした。8 月 7 日のこと。ロニービッグズは晴れて「自由人」なったのである。その時に彼は何ら悪ぶれることなくこう言った、「バンザイ、大喜び」。80 歳。
息子のマイケルも同じこと。一言の詫びもない。「悪かった、」。
今日 8 月 11 の当地の新聞は又、ロニー、釈放された途端に元気になったと伝えている。

世の中には、色々な才能を持った人が居るものである。いかにも忌々しい男であるが、このロニービッグズも、ある意味では才能を持った男なのかもしれない。
でも何という才能か、。

ロニーに比べて遥かに日本人受けしそうな「良いワル」がいる。やはりこの大強盗一味のロナルド“バス

ター”エドワーズがそれである。
「バスター」という題名で後に映画化されたのは彼のことである。フィルコリンズがバスターを演じている。

バスターはこの強盗事件では、ロニーより遥かに主謀格であったという。事件後、首尾よく家族とメキシコに逃げおおせたが、子供達がホームシックにかかったこともあり、結局 3 年後英国に戻り自首。そして、9 年の刑期をつとめあげると、ロンドンウオータールー駅頭で花を売って生活した。

その後、あるインタービューに応えて言った彼の言葉。
「花を売っててもさあ、そりゃ、まあ詰んないわね。そこへ行くと、金もそうだが、あの強盗をやらかしてるときのスリルときたら、堪んないねぇ。」
バスターは、結局 1994 年に、自らの命を絶った。

英国人には、どうも、犯罪者を、それが余程の凶悪犯でない限り、又は自分がその犯罪の直接の被害者でない限り、それ程憎まないところがあるようである。
（12/08/09）

「クリスヒューンの栄光と凋落」

英国自民党の元資源相クリスヒューン（Chris Huhne)とその元妻ヴィッキープライス（Vicky Pryce）に、この程実刑判決が下された。懲役８か月。罪名は何れも「偽証」。

それ迄のヒューンは、将来を嘱望された政治家であった。
現行の英政府は、ご存知の通り、保守党（キャメロン首相の）と自民党との連立で成り立っている。
最後の組閣で資源相に任命されたヒューンは、目下の副首相ニッククレッグ（Nick Clegg）を継いで、自民党の党首に収まるものとの大方の予想であった。

一方のプライスは経済の専門家で、通産省で経済相談役をしていたかと思えば、大学で教えたこともあると言う才媛。
ヒューン 58 歳、プライス 60 歳。
二人の間には一男二女の子供があり、何れも成人している。プライスには、その前の結婚で、更に二子がある。如何にも「やり手」のこの夫婦、只、残念なことに、数年来、殊の外折り合いが悪く、結局 2011 年に離婚した。

そして、この二人、目下刑務所暮しである。
ことは、十年前の 2003 年、ヒューン宛に一通の通知が来たことに始まる。
エセックス警察からのもの。

ヒューン所有になる車が、高速道路のカメラに捕まり、制限速度を遥かに超える速度違反であるという。

その時、彼がすんなりと罪状を認めていれば、何も自分の華やかな「政治家生命」が絶たれるなどと言うとんでもない事態には至らなかったのであろうが、如何せん、彼の免許証にはもう減点が目一杯。これ以上減点を食らうと、罰金はいいとしても、半年の免許停止という羽目に陥る。

然し、そうすると、彼にとって甚だ不便になることは勿論であるが、それよりも、可成りの野心家である彼の政治家人生に大きな汚点を残してしまう。
そこで、ヒューン、一計を講じた。
「あの時運転していたのは、妻のヴィッキーだった」と言い張ったのである。
ヴィッキープライスもそれに同意し、罪を自ら被った。

それからほぼ 7 年、他の誰もそれを知ることなく、二人は、夫々の分野で活躍。ヒューンも、そのことを殆んど忘れてしまっていたのかもしれない。
然し、それを決して忘れることのない人間が一人居た。
勿論、妻のプライスである。

後年、二人の結婚が暗礁に乗り上げた。2010 年のこと。
夫のヒューンに新しい女性が出来、プライスとの結婚を解消すると公言したのである。
すると、プライスは、この可成り前に起った出来事を巧妙に利用し、夫への報復を図った。
離婚の一年前。
この年、ヒューンは資源相に任命されている。

プライス、ここぞとばかり、「あの時、車を運転していたのは自分ではない。夫のクリスである」と、大手新聞に尻を持ち込んだから堪らない。
二人は裁判にかけられた。
ヒューンは当初全てのことを猛然と否定したが、息子からの自分に不利な証言もあり、逃げられないと分ると、罪状をあっさりと認めた。

又、プライスはと言えば、元夫を貶めるという目論みにはまんまと成功したけれど、彼女自身も、結局同じ運命を辿らなければならなかった。
「クリスに強要されてやったもの」という彼女の主張は通らず、プライスにもヒューンと同じ実刑判決が下った。

10 年程前に高速道路カメラが偶然捉えた速度違反、それが何と閣僚の失脚に迄発展してしまったのである。

私、英国のこういう所が大変好きである。
「法」は「絶対」であって、それに逸脱する行為に及べば、その行為者には、その社会的地位の如何に拘らず、同じ制裁が下される、。
今度のこの一連の事件に於ても、そもそも、それは「速度違反」と言う小さな罪なのであるから、何とか、裏工作をして、有耶無耶にもみ消してしまった方が、余程、全てのことが丸く収まって、お金もかからないし、と思われるかもしれない。

然し、「法律は法律」である。

この論法で行けば、極端な話、法は、英国王室の人達にも、公平に適用される筈である。
私の知っている唯一の具体例は、アン王女が、一度スピード違反で捕まえられたこと位。もっと大きな例があれば、私、この国、もっと好きになるかもしれない。

因みに、私、ヒューンの他にも三人、裁判にかけられ実刑判決を下された著名な政治家を知っているが、その何れも、その後、再び陽の目を見たとは、ついぞ聞かない。

(16/03/13)

想い出に残る人たち

田村　陽子

年を取るにつれ、昔の事や、昔出会った人達が懐かしく想い出されて来る。私は 2 人の祖母と、私の恩師の思い出を綴ってみたい。

６．７才の頃、私はよく母方の祖母の所へ遊びに行って泊まってきた。歩いて４０分程の所にある海辺の町に一人で住んでいた。そこに行くと必ず銭湯に連れて行かれた。家では五右衛門風呂にしか入ったことがなかったので、プールのような広いお風呂で湯水をたっぷり使えるのがうれしかった。そして、その町にある床屋で髪を切ってもらった。家では父がバリカンとハサミで父の好きなように仕上げるので、イヤだった。

５月のある日、祖母はバケツをふろしきにつつんで、肩からかついで何かを運んできた。海辺に住んでいる祖母は、とりたてのホタルイカを４０分も歩いて持ってきたのだ。あの頃の祖母は何才だったのだろうか。子供の頃、病気がちで休学もしたという母のことをいつまでも気づかって“遠路もいとわず”という気持ち、今の私なら、分る気がする。

又、私は歩いて１０分程の所に住む父方の祖母のところへもよく行った。大きな農家に嫁いだ祖母は働き者で、腰がくの字に曲がっていた。田畑が沢山あったので、休むひまもなく働いていた。ある日、私のひざに大きなイボがあるのを見つけて、「竹やぶに行って、誰も見てない時に、このナスでこすってみられ。あしたの朝、とれてるチャ！」と言ってナスを半分に切って渡してくれた。その通りにすると、本当に次の朝イボは取れていた。どこへ消えて行ったのだろう。「おばばはすごい事、知ってるナ」と子供心に思ったことだった。祖母は地主の家に嫁いだが、農地改革のあと、大変になったようだった。

次に学校の先生の想い出を綴ってみたい。

小学校２、３年の担任は、若い男の先生で、６時間の授業が終わると、毎回本を読んでくれた。今だに覚えているのが宮沢賢治の「風の又三郎」である。「ドゥドド、ドウドド」と風の吹く様子を抑揚をつけて話してくれた時、不思議な世界に誘い込まれたのを今でもはっきり覚えている。

小学４、５年の担任は女の先生で、自習が多くて、その間先生は居眠り、生徒達はワイワイ、ガヤガヤ大騒ぎ。６年の男教師も自習が多く、彼は職員室で一服しているようだった。勤務評定もなかった昔の、のんびりした頃の想い出である。

中学生になると、市内の５つの小学校から集まって、１学年 10 クラス、450 のマンモス校であった。中１の担任は英語の先生で、毎回、単語テストがあった。ある日、私は、半分も書けなかった。すると前に立たされて、大きなゲンコツをくらった。恥ずかしかった！イタカッタ！それ以来、しっかり勉強に励んだ。

中２の担任も英語担当。彼はとてもユニークな授業をした。期末テストは一枚の用紙に「“うさぎとかめ”のストーリーを英語で書きなさい」と書いてあるだけ。四苦八苦して単語を寄せ集めて、文を書いたのを覚えている。

中３の担任は国語の女教師。頭が切れて、職員会議でもリーダーシップをとっているのだと、クラスメートのもっぱらのゴッシプであった。事実その先生は、後に富山県で初の女性校長になり話題となった。スラッとして目が大きく丸顔だったので「満月」というあだ名がつけられていた。でも私はひそかに「キュウリー夫人」と呼んで尊敬していた。

高校に入ると、１年の担任は男の英語教師。英語の虫で帰宅途中、駅へ向かう間も、同僚の英語教師と英語で会話しているのだ。その先生は後程ハワイ大学留学を果たして、増々英語に磨きがかけられたようだった。

大学に入ると最初の一年半は、一般教養課程と音楽を選んだ。印象に残っているのが器楽担当の教授

だ。夏休みに山奥の学校で合宿をすることになった。３０人位いただろうか。最終日に、練習の成果を発表することになっていた。その前の晩のことである。練習前にいつもの様に弦楽器は「ラ」の音に合わせなければならない。１人ずつ、試されて、３０人のメンバーの音が中々一致しない！とうとう夜中になってしまった。教授のイライラ、音楽のきびしさをひしひしと味わった。翌日のコンサートは成功したのか、どうなのか、さっぱり覚えていない。ただ皆と食事を作って食べた事、大きな講堂で全員枕を並べて眠りについたこと、忘れられない思い出である。

それで音楽の道はあきらめて、英語を学ぶことにした。英語の教授はその頃、ラジオ講座を担当していたので、名前は知っていた。

最終学年で卒論を書くことになっていた。締め切りが間近だというのに、中々仕上がらない。ある日速達が届いた。「締切日が過ぎている。大至急、指導教官に連絡をすること」と赤い字で書かれていた。それを見た母は何ごとかとビックリしたようだった。教授の家に電話をすると奥様が応答されて、「主人は今床屋に行っている。すぐ連絡します」ということだった。この後が大変だった。後日教授に合うと、「あの日家内はネ、病気で寝込んでいたのだョ。だのに床屋まで走って知らせに来たのだョ。卒論が仕上がらなかったら早めに、一言相談して欲しかった！」と。

このような事がもう一度あった。
それは真冬の雪の積もった日の事。授業が終わって友人４、５人と歩いていると、ビニールの袋のようなものを、かぶった人が歩いて来た。よく見ると私達の英語教授だった。それであいさつすると、「ヤアー、お茶でも」ということになり、喫茶店に入った。「さあ、さあ何でも好きな物を注文しなさい！」教授のおごりで、おいしいお茶をして帰宅した。

次の日学校へ行くと、「Ｅ教授休講」と掲示板に出ていた。事務所に行ってたずねると、先生はひどい熱と風邪だと分かった。喫茶店の暖かいところから、トボトボ歩いて、風邪となったのだろうか。悪いことしたナーと皆思ったことだった。

皆、みんな、懐かしい思い出の人たちばかりでした。「ありがとう。お世話になりました」と心から叫びたい。

私流 IT 時代の楽しみ

古川隆

「おじいちゃんのモバイル、博物館行きだね」
夏休みに訪ねてきてくれた孫娘の言葉である。確かに 20 年以上も前に使い始めた NOKIA のこの携帯電話、今ではお目にかかることは滅多にない。「でもね茉弥、スマートフォンのように多くのファンクションはないけどこれで十分役にたってるんだよ」「ふ～ん」

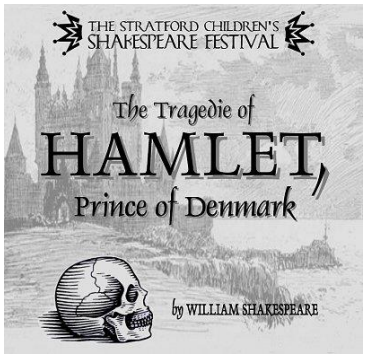
そうなのである。仕事をやめて数年、今では当然のことながら仕事の打ち合わせの電話などはかかってこないし、連絡の取り合いはメールかメッセージで十分。したがってモバイルフォンの料金は微々たるもので年金生活者にとっても無理のないものである。とはいえ IT 時代の恩恵は十二分に享受している。何かを調べたい時には質問事項を打ち込めば、立ちどころに殆どのことを知ることができる便利な世の中になっているのは周知の通り。人にものを訊ねられ、なまじっかな説明をすると後で「千早ふる」のご隠居さんの二の舞を演じることになる。尤も、最近の情報サイトの中にはかなり不正確なものもあるようなので、頭から信用するのには問題があるようではあるが。溢れる情報の信憑性を確かめるためには、面倒くさいが複数のサイトで再確認する必要があるようだ。

最近 IoT (Internet of Things)が次世代の第４次産業革命の主体となるという記事を目にしたが、要するにすべての物事はインターネット経由で忙しく指を動かすスマートフォンに繋がることになるのだろうと自己流に解釈している。

それはさておき、 最近私が楽しんでいる IT 関連の事柄に演劇・バレー・オペラなどを映画館で観ることができるようになったことがある。私の住む街の映画館ではイヴェント・シネマ（Event Cinema）として公開されているこのプログラムでは、Stratford-Upon-Avon, Covent Garden, National Theatre, Coliseum, Glyndebourne などの英国主要劇場を始めとしてボリショイ劇場、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場、コメディー・フランセーズなどからのライブ中継（または録画）を楽しむことができ、演劇・音楽ファンの私にとっては一大朗報で、しかも低料金。

最初に観たのは、キューバのバレーダンサー、カルロス・アコスタ最後の公演「ドン・キホーテ」。それまでは高額なストール席を購入することなど滅多になかった私にとっては、舞台上でのバレー・ダンサー達の細かな表情を観察することは出来なかったが、このライブでの素晴らしいカメラワークのお陰で画面に映し出されたダンサーの表情の豊かさに驚かされ、それ以後はロンドンの劇場へ出かけることなく、このライブ中継を楽しんでいる。

このプログラム鑑賞時の今一つの楽しみは、開演前や幕間の舞台裏の模様が映し出され、出演者たちの練習風景、演出家や衣装係の話、時として主演俳優や歌手やダンサーとのインタビューを聞く事ができることである。こんな楽しみは劇場では経験することはできない。



先達て RSC（ロイヤル・シェイクスピア・カンパニ）のハムレットを観たときに驚いたのは、ハムレットを始め俳優たちの殆どが黒人および混血のスタッフであったことだ。これまでにも黒人が主役を演じた劇はあったそうだが、出演者が殆どノン・ホワイトの BAME (Black, Asian and minority ethnic)というのは珍しいことだったのではなかろうか。黒人俳優の演じるハムレットが現れたときにはいささか違和感を感じたが、劇が進むに連れて次第にそのようなものは薄れていき、終わったときには最初に感じた違和感はすっかり消え去っていた。役者の演技力とは大したものだと感心し、自分自身の感情の変化にも不思議なものを感じさせられたものである。周囲のイギリス人観客もごく自然に楽しんでいたような気がしている。多民族国家のイギリスではこのような傾向は今後も続いていくものと思われるので、歴史上の王や女王を BAME 俳優が演じてもさほど違和感を感じない時代が来ているのかもしれない。ちなみに日本人初の RSC 劇団員は、本誌にも数回投稿されている伊川東吾氏で、それ以後の入団者はいないが、イギリスにおけるシェイクスピア劇団での出演者としてはイプセン作の「ペール・ギュント」の壤晴彦（1994 年）、「リア王」 の真田正之（1999 年ー2000 年）（いずれも蜷川幸雄演出）がいる。なお、真田正之は日英両国の文化交流の架け橋としての功績を評価され、MBE （名誉大英帝国勲章第 5 位）を授与されている。

オペラやバレーはあまり言葉の障害もなく存分に楽しめ、演劇も現代劇なら何とかついていけるが、 シェイクスピア劇を見るときには辛苦が伴うことになる。観劇前に前もって粗筋を読んではいても 400 年以前の古文体で続くあの長いセリフについていくのは私の拙い英語力では大変で、始まってからしばらくすると、脳細胞がしきりに休め休めと命ずることに起因すると思われる睡魔と戦うのに一苦労することになり、時折隣の席の細君に脇腹を突かれ目を覚ましたりする。尤も、演目の内容を知らないで能や人形浄瑠璃を観る時も同様ではあるが。これではいけないと一念発起、2017 年にはシェイクスピア作品を何点か読破しようと思っているが、三日坊主の事ゆえどれだけ続くか大きな疑問符がつく。しかし、年老いても新しいことに取り組む意気込みだけはまだまだ残っているわい、と自らを眺めたりもしている。今年の見納めは、オペラ「ホフマン物語」、2017 年の見初めはバレー「眠れる森の美女」を予約済み、今から楽しみにしている。近い将来、パリ・オペラ座やミラノ・スカラ座、ヴェローナの野外劇場などから中継されるようになってほしい、というのが新年の夢である。

*東吾さん、長らくご無沙汰していますが、お元気で活躍の様子何よりです。誌上をお借りしてご機嫌伺いまで。古川

英国春秋つれづれに

燕　百　話

燕が飛来する時期が近づいてきた。彼らは何処から旅して来るのであろうか。
つばめと云えば、すぐに思いつく句がある。「　つばめつばめ　泥の好きなる　つばめかな　」　これは俳人、細見綾子の作である。特に上手いとも思えないし、ましてや好きな句とも言えないのに、なぜかいつも口の端にのぼる。きっと自分でも知らない心の何処か、深層心理ではひどく感銘を受けているのだろう。

昔、祖母の家に燕の巣があった。毎年春になるとやってきて、子を孵し、秋には南の国に帰って行った。その頃は営巣材料の泥も藁くずも豊富にあったし、捕食する昆虫にも事欠かなかった。ちなみに彼らは食用として一日に 6,000 匹の小虫が必要であるとの事。その光沢ある青黒色の背と、白色の腹をみせながら、素早く空中飛行するさまを見るのは気持ちの良いものであった。話は変わるが、下世話に言う、年増の女に可愛がられる若い男を「つばめ」と呼ぶが、その由来は何処から来たのであろうか。もう一つ、燕去月（つばめさりずき）とは、陰暦八月の異称だそうだが、これが使われた俳句、短歌にはいまだ出くわしたことがない。

中華料理の珍味の一つに、“燕の巣スープ”がある。人が近寄りにくい絶壁に、海藻を噛み砕いて岩燕が巣を造る。勿論、子を孵すためである。折角造られたその巣を、人間様が盗んで喰らってしまうのだから何ともひどい話である。

過日、アメリカを旅した折、湖畔のボートハウスの橋げたの下を、何十羽ものつばめが、盛んに出入りしていた。おそらくそこに巣を造っているのだろうが、こちらからでは何も見えない。一体、どんな材料を使っているのかと気になった。

さて、イギリスの話だが、この国にもツバメはやってくるのだろう。飛んでいるのを見たような気もするのだが、確かではない。いつか「ああ、ツバメが」といったら、「ああ、あれはマーティンだ」とイギリス人から訂正を受けたことがある。しかし、シェイクスピアの作品の中で、イギリスを舞台にした、「ヘンリー４世」には確かにこの鳥が登場する。フォールスタッフのセリフで「・・・ですが、殿下、この私を燕とでもお思いですか、あるいは矢や鉄砲玉とでも？このあわれな年老いた図体を、思った通りの速さで動かせるもんでしょうか？・・・」とある。（小田島雄志訳）つばめが“素早く敏捷に”の比喩に使われるのはここでも同じらしい。それで気になるのは彼らの巣の材料である。
日本では泥とわらくず、中国では海藻、アメリカでは（想像だが）橋げたの狭間、そしてイギリスではまさかレンガのかけらと言うわけにはいかないだろう。

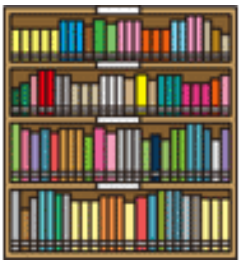
「私の好きな本」を考えることについて

渡邊伸吾

私の好きな本について書くため机に向かった、ある日曜日の朝。パソコンを立ち上げれば何か考えつくだろうと軽い気持ちで臨んでみたのが、なかなかどうして、これは難しいと考え込んでしまった。選べない。もう一度言おう（書こう）。選べないのだ。

ある本が浮かび、その筆者の別の作品を思い出して、一冊だけを選ぶのもどうかと思ってしまう（何の世間体を気にしているのか！）。またある本が浮かび、今度は別のジャンルの本を書くべきではないかと私の中の誰かが囁く（マンガも忘れないでね、とか）。また英国春秋の読者諸氏には読書量も豊富な方がきっと多いはずで、若輩者の私はあえて斬新な視点の本を紹介すべきではないかと思い、いやいや、やはり素直に自分が好きな本を書けば良いじゃないかと思い直す。

さらに「無人島に持っていくなら」「好きな人にプレゼントするなら」「最も涙したものは」などあの手この手で本を絞ろうとするのだけれど、どの本も自分の中に浮かんでは「自分（注：本のこと）を紹介しろ！」とわめき散らして言うことを聞かない。



…本棚を見て、何気なく一冊を選びそれを書こうか。そう思い本棚を見るものの、やはりどうにも甲乙つけがたい。手元に置いてあるのは自分が一生読むだろうと思った大切な本ばかりなのだ。これかなと手に取った本をパラパラとめくり始めれば、かつての自分が引いた線（当時は名言だと思っていた！）に心奪われ、連想ゲームのように別の本を思い出す。インターネットでどんな話だったかを再確認し、ドラマ化/実写化されていることを知り嬉々として YouTube で検索に向かう。そうこうしているうちに腹の虫が鳴り、日曜日の午前中が泡と消えたことを知る。私の好きな本、これはなかなか曲者だ。

ここまで考えて気づいたことがある。「私の好きな本」を決めることはとても難しいが、「私の好きな本」について考えることはとても楽しいのだ。例えばゲーテや太宰治など古典・近代文学から選ぼうと思うときには、筆者のいた時代背景について考えないわけにはいかないし、反対にゼロ年代以降の本（例えば社会学者の古市氏）やインテリジェンスの佐藤優の著書を考えるときにはその本がどれだけ社会の事象について鋭い視点を提供しているかを考えるべきだろう。誉田哲也や横山秀夫に代表される推理小説ならトリックの妙や犯人と主人公のキャラクター設定を語りたくなるし、伊坂幸太郎のライトノベルやキノの旅、ブギーポップなどの SF 小説はその世界観を構築していく著者の頭の構造が気になって仕方がない。ドラッカーや大前研一のビジネス書の先見の明に感動した若い自分を思い出し、人生の地図（高橋歩）や風のような物語（星野道夫）を読んで、感性に身をおもねることで開かれる世界と人生に憧憬した日々があった。

過去現在未来を縦横無尽に行き来し、政治経済アングラ SF なんでもござれ。そう、自分にとって本とは、まだ見ぬ世界と自分をかくも自由に繋げてくれる小さな扉だったのだ。狭い部屋で気づいたことは意外に大きいことなのかもしれない。結局最後まで「私の好きな本」を選ぶことは叶わなかったが、「私は本が好き」ということを再確認できた日曜日だった。

マニラの思い出

鶴岡　公二

1983 年 5 月、私はアセアン諸国を訪問する中曽根康弘総理大臣の通訳としてマニラにいた。
宿舎はコロニアル様式の壮麗なマニラホテルである。総理のフィリッピン訪問は大統領官邸のマラカニアン宮殿での首脳会談、同宮殿大宴会場での盛大な歓迎晩さん会と続き、マルコス大統領は中曽根総理を大歓迎した。友好一色の首脳会談や晩さん会での通訳は難しい話題も出ずとても楽しいものだった。マニラ訪問も成功裏に終了し、一行に残ったのは次の訪問先に向かうだけとなった。総理大臣一行は、飛行機で移動する際に荷物の検査を事前に行うことになっており、出発の前夜までに荷物を空港に運び込み、出発時には手荷物程度の軽装で空港に向かうことになっていた。一行は総理車列に先立って空港に向かう。私は、マルコス大統領が総理を空港まで見送る両首脳の車に同乗して通訳を務めながら空港に向かう手筈となっていた。大統領が宿舎のマニラホテルに総理を迎えに来るのは朝 9 時の予定だった。前日の晩さん会で通訳を務めたのちに夕食を済ませ、荷物を出していた私は、一行よりも遅い出発を予定して、8 時ごろに起きて身支度をした。何とワイシャツがない。前日遅くに荷造りをしたときに翌日着るはずのワイシャツまで出してしまい、下着の上にスーツを着るしかない状態になっていた。同行者は早朝に空港に向かっていて同僚は既にホテルを離れていた。下着の上に上着を羽織って廊下に出てみたものの、忙しく総理の出発に備えて走り回っている大使館員以外には誰もいない。ランニングシャツの上に首に直接ネクタイを締めてみたもののどうみてもおかしい。おかしいどころか人前に出られるような姿ではない。はたと気づいて電話でホテルのメイドを呼んでみた。ホテルにはシャツを売っている店がある。そこでシャツを買ってきてほしいと頼んだが、売店は 10 時にならないと開かないとのことである。あと 30 分で出発時間だ。これはもうどうしようもない。いかにみっともなくても下着の上に直接上着を着て首脳車両に乗り込むしかない。覚悟を決めて時間までは寝るしかないと 5 分ほどベッドで横になった。するとノックがあり、メイドがシャツを持って入ってきた。何とか店を開けさせてシャツを一枚買ってきたというのだ。地獄に仏とはこのことだ。早速シャツを着て代金を支払い、身づくろいをして飛び出した。ホテルのチェックアウトを済ませ、マルコス大統領をホテルの玄関で出迎え、総理とともに車に乗り込み空港に向かった。メイドのおかげで九死に一生を得た。メイドは満面の笑みを浮かべてとにかく無事シャツを入手し出発出来て良かったと喜んでくれた。

車に乗ると、両首脳と私は相対する座席に座って通訳を務めることになった。横に通訳がいる時と違いどうしても通訳を見ながら両首脳は話すことになる。話をしながら中曽根総理が怪訝そうに私をじっくり見つめた。私が入手したシャツは、スーツとは全く合わないし、ネクタイをするようなシャツではなく派手なアロハシャツだったのである。無理矢理おおきな襟をネクタイで絞めて何とか形を作ったのだが、服装の異常さに中曽根総理も目を疑ったのである。マルコス大統領は総理を見送るために、フィリッピンの正装であるバロンタガログというきれいなベージュ色のシャツを着ている。総理はきちんとしたスーツである。通訳が着ているのは派手な原色のアロハシャツに形ばかりにネクタイを締め、その上に黒鼠の制服のダークスーツである。誰が見ても噴出さずにはいられない服装だった。マルコス大統領も空港までの道のりで笑いを必死でこらえていたものと思う。中曽根総理は理解できないといわんがばかりの厳しい目つきで私を見ていた。針の筵とはこういうものかと思った。しかし、地獄にも終わりはある。車がようやく空港に到着した。これで解放されると安堵したら、そこから空港での総理を見送りする公式行事が開始した。軍の正装した音楽隊が見送りの音楽を奏でる中、テレビカメラの放列の前を両首脳が歩き、私はその後ろからなるべく姿が見えないように小さくなりながら付いていった。誰も通訳を見ることはないと思い

つつも刺すような視線を感じていた。飛行機のタラップにようやく到着した。

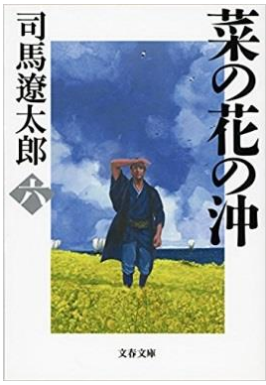
マルコス大統領の別れの挨拶を中曽根総理が受けられ、私が通訳をし、総理そして私はタラップを静かに登って行った。最上段で総理は振り返り手を大きく振って別れを告げて機内に入った。私は間隙を縫ってさっさと機内に消えていたことは言うまでもない。中曽根総理からは変わったシャツだなと車の中で言われた。脂汗が溢れ、どんな首脳会談よりも疲弊した通訳の仕事がようやく終了したのである。もちろん車中の会話は何も覚えていなかったことは言うまでもない。

私にとり、これは貴重な経験となった。総理に同行する時の事前の荷物を出す際に二度と間違いを犯さなくなった。もちろん、一度でもこのような深刻な間違いは犯すべきでないのであるが、変なシャツでもなんとかしのぐことができたのは奇跡としか言いようがない。下着のランニングシャツに直接ネクタイを締めることに比べれば変なシャツでもシャツはシャツなのである。私は、難局に至っても必ず救われる道はあると確信するようになった。

もし、廊下に下着のまま出て、大騒ぎで助けを求めていたらどうなっていただろうか。誰か自分が着ているシャツを脱いで私に渡してくれただろうか。考えだせば様々な対応が出てくるが、結局は運を天に任せ、果報は寝て待てを信じたら、天がメイドを使わして私の窮地を救ってくれたのである。まったく幸運であったと感謝するほかはない。その後も中曽根総理の通訳を長く務めたが、このような間違いは二度と繰り返さず無事任務を全うしたのである。

昨年 6 月に私は駐英大使としてロンドンに着任したが、30 年以上前のマニラで大失敗を犯していたらロンドンに来ることはなかったであろう。メイドなくして駐英大使なし。フィリッピンには足を向けて寝られない思いである。自分に責任があるが今思い起こしても大変な目にあった。そして助けてくれたメイドに心から感謝したい。
実は、こんな失敗をした私なので他にも失敗はあります。もちろん一つや二つではすみませんがそれはまたの機会に致しましょう。
こんな大使で皆様不安でしょうが、大使館は優秀な館員に恵まれており、何らの御心配には及びません。ただ、私については皆様の御支援と御協力を心よりよろしくお願い申し上げます。

菜の花の沖



メータ　美知子

私は読書家ではないが、好んで読んだ本がある。もう大分昔のことだが、ロンドンに通勤していたころ、勤めていた会社の本棚で見つけた本が“菜の花の沖”である。長編だが通勤時間を利用してかなり読んだのを覚えている。

江戸後期の淡路島から始まるが、主人公の幼少時の名が菊弥と言い“キッキャ”という発音で呼ばれていたので、つい祖母のことを思いだした。子供のころ祖母の話を聞いていた時、たしか似たような発音で人の名を呼んでいたような気がする。読みながら昔のことを思いだして苦笑したりした。話がそれたが、そのキッキャ

が１５歳位で元服すると嘉兵衛と名のった。淡路島の貧家に生まれた彼は悲惨な境遇から海の男として身を立て、やがては立派な商人になり、遥か蝦夷地で活躍することになる。

淡路島でおくった嘉兵衛の青春期は、今の世代では考えられないほど悲惨なものであった。ならぬ恋をしたばかりに命まで危うくなり、ついには島を抜け出すことになる。危機から逃れるために、ものに狂ったように歩き、山中で夜明けをむかえ、島のある浦にたどりつくと、今から出ようとしている船にとび乗った。その生きる姿には強い生命力を感じる。
そうして兵庫にたどり着き、遠縁にあたる廻船問屋の主人を頼る。そこには嘉兵衛の弟が船乗りとして働いているのだ。嘉兵衛の人生がここで大きく変わる。大船にのる機会ができたのだ。もともと海が好きな彼は船乗り程おもしろいものはないと思った。全身で風を感じ、あるいは船端からのぞきこんで潮を見、また船尾にまわって帆綱をひっぱったり、舵をうごかした。また、嘉兵衛はいくつかの楽しみも知った。たとえば船が順風をうけながら帆走しているとき、皆で一つ鍋をかこんで夕食をとる楽しさは、陸にいる人間には想像しがたいものであった。彼は淡路の浦で働いていたころ、一度も若い連中から好かれず、自分は嫌われ者だと思いこんでいたようなので、息の合った仲間たちと過ごす時がわけもなく嬉しかった。嘉兵衛はうまれてこのかた仲間とともに、これほど気持ちのいい時をすごしたことがなかったのだ。

やがて、嘉兵衛は船頭になり、紀州から檜木の丸太を江戸まで運ぶことになる。その後、太平洋を北上して常州（現在の茨城県）の那珂湊へ行くことになった。なんと私の生まれて育ったところではないか！房総半島をまわり、九十九里沖をぬけて那珂湊に近づくにつれて、就寝前でまどろんでいた目がさえて、なかば興奮気味で読んだのを覚えている。
嘉兵衛は那珂湊の土をふんだ。土地の者に案内されて商家の集落を通り抜ける場面に、「那珂湊は路地の多い町である。一つ路地をぬけるとまたべつの路地があって、それに入りこむ。路地わきの板壁には海風のにおいがしみこんでいる。」というくだりがある。それを読んで、幼いころのふるさとの情景に想いをめぐらせた。読んで行くうちに、その昔は那珂湊が商港として栄え、水戸よりもにぎわっていたことを知り驚いたりもした。しかし、都市の繁栄というのは交通によって変化してしまうようで、今では昔ほどの栄えは見られなくなったのだが。
ところで、この浜には一艘の破船が引き上げられていた。嘉兵衛は兵庫の廻船問屋の主人の依頼でその船を検分に来たのだった。そして、この土地で修繕できるものなら、そのようにして乗って帰って来てもよいという連絡を受けていた。嘉兵衛はようやく自分の船を得ることができるのだ。この船を得ることで、まがりなりにも持ち船の船頭になれるのだ。しかし、この船は松前へ行きたいという彼の望みをかなえてくれそうもなかった。この古い船では北海の風浪に耐えられそうもないのである。（この時代、松前という地名は海産物の宝庫というイメージがあった。そして、松前や蝦夷地は私たちが想像する以上に遠いところだったようだ。）

後に、嘉兵衛は秋田の船大工に千石積の大船を建造してもらうことになる。奥州から材木を運んでくる時に、嘉兵衛の船が秋田の湊に寄港するのだが、その夕方から海が荒れはじめ、この湊にしばらく滞在することになる。そこで船大工の与茂平に会うのだ。嘉兵衛はこの人物に興味を持つ。彼と毎夜酒を置いて語りあううちに、ますます与茂平を気にいるようになり、この人となら一生つきあっても良いとも思えた。そして自分が最初にもつ蝦夷地ゆきの大船は、この人に造ってもらおうとまで思うのだった。兵庫に帰れば近くに大きな造船所があるのに、秋田の小さな湊で船を造ろうというのは、まず与茂平に魅力を感じたからだろう。嘉兵衛の人柄が感じられる。
やがて、嘉兵衛はこの千石船で日本海の荒波を蹴たてて、念願の蝦夷地へ行くことになる。

菜の花の沖は司馬遼太郎の作品だが、登場人物の描写がうまく、読者をストーリーの中に惹きつける魅力がある。読んでいると、知らないうちに顔がほころんでいたりする。この小説のなかで日本の各地（主に湊町や漁村）が紹介されているが、情景の描写が詳しく、とても興味深い。多分、筆者は日本中を旅したのだろうと思う。今、ふたたび読み返して嬉しい六冊である。

英国春秋俳壇

エリオットつや子

寒バラ

ふぞろいの紅葉３枚手のひらに

びっしりと赤の宝石ざくろの実

ぼろぼろと実こぼしながら食むざくろ

冬帽子手編み紫おさがりよ

何日も前から予報の雪到来

庭に落つ野鳥ながむるクリスマス

声ゆらぐ病の友に冬長し

寒バラの堅きつぼみに根負けし

雨やんで木の葉しずくに春キラリ

暖かき春日背に受け草むしり

巡礼の旅

ローマ、サンチャゴ・デ・コンポステラ、エルサレム

小川のり子

「・・・我々もまだまだイケルじゃないのと自信が持てたのは、世界遺産登録の四国八十八ケ寺遍路で、四国一周を達成（車で）したからです。・・・歩いてのお遍路さんに西洋人の多いのに驚きました・・・」とこれは日本の友人から送られたクリスマス・カードの一節。この友人夫婦は７０代の半ばで、このあと歯のインプラント、白内障の手術、そして何やら難しげな心房細動治療と続くから、やはり正真正銘の老人である。しかし巡礼の旅に出かけるのは何も目や歯の“老化補強組”だけの専売特許ではないはず。そこで八十八ケ所までは行かないが、中世以来キリスト教の世界ではもっとも重要な三大巡礼地とされた、ローマ、サンチャゴ・デ・コンポステラそしてエルサレムの旅の話を綴ってみたい。

ローマとカラヴァッジョ

ローマには教会がゴマンとある。訪れる度によくも共倒れにならないものかと感心する。旅行者が多い昼間はそうでもないが、ミサの時間帯になると随分多くの信者が集まってくる。クリスチャンでもない異教徒の目にもその絢爛豪華な内装には、神の存在をさえ信じさせてしまいそうな何かがありそうに思える。しかし、不敬ながら私の訪問目的は第一に、祭壇画である。その昔多くの無知蒙昧な信者には、聖書のシーンを題材にした絵画が何よりもアッピールしたので、聖職者はもちろん裕福な商人たちが競って、当時の有名画家に祭壇画を描かせたそうだ。私も神を知らない無知な一人であるのか、イタリアを訪問する楽しみはこの祭壇画巡礼と言っても言い過ぎではない。

サンタゴスティーノ蔵

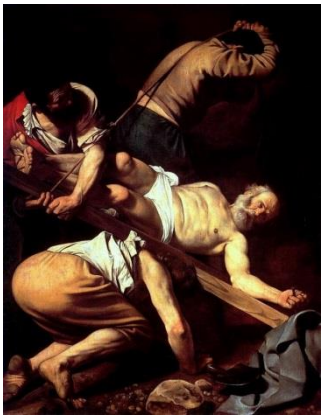
ローマはナボナ広場の近くにサンタゴスティーノと言う教会がある。ここにカラヴァッジョの「巡礼者の聖母」が飾られている。この祭壇画については以前、「三枚の絵」と言うタイトルで文集に小文を載せたが、最初この画に出会った時はしばらくその場にくぎ付けになってしまった。マリア像が非常に魅力的な生々しい女性として描かれおり、それはレオナルドやラファエロの聖母を見慣れた目には何とも新鮮で、人間味にあふれ、血が通っていたからである。その為か当初はこの画についての批判者も多かったとも聞く。聖母が普通の女性のようで神聖さに欠ける、巡礼者夫婦が長旅の後とはいえ汚れた服装で素足である、抱かれる神の子イエスが大き過ぎる云々だったらしい。この画家は色々と問題のあった人でもある。現在ルーブルに大きな場所を占めて飾られている「聖母の死」は、本物の溺死体をモデルにしたとかで、依頼した教会は受け取りを拒んだと聞く。確かに神聖さには欠けるが、ルネッサンスの綺麗ごとから抜け出して、市井の生きたモデルを使い、新しい画風への挑戦者としてのカラヴァッジョには、現代の我々にはよりアッピールするものがあるように思える。

コルソ通りをまっすぐに北上するとポポロ広場に突き当り、そのそばにサンタ・マリア・デル・ポポロ教会がそびえ立つ。そして正面に向かって左側のチェラージ礼拝堂に、カラヴァッジョの「聖パウロの回心」と「聖ペテロの磔刑」の二つの祭壇画が、狭いチャペルを圧倒するばかりに掲げられている。

熱心なユダヤ教徒であったパウロであるが、ある日ダマスカスに向かう途中、キリストの「あなたは何故私を迫害するのか・・・」との声を聞いて稲妻に撃たれたような衝撃を受け、キリスト教に回心する。多くの画では落馬したパウロが一瞬見えなくなった目を硬くつぶり、大きく両手をひろげて、地上に仰向けに倒れている姿であらわされる。カラヴァッジョはその瞬間を、画面の上半分に乗り手を失った馬、下半分に剣を腰に下げたままの兵士姿のパウロが仰向けに地上にたおれているというシーンをクローズ・アップで描いている。黒皮で縁取りされた暗赤色の兵士のコスチュームを付け、羽飾りのついたヘルメットを脱ぎ捨てて、大きく両手を前面に広げながら、突然のキリストの声に茫然とするパウロを、光と影の旗手であったこの画家は、あたかもフット・ライトでその姿を浮き上らせたかのように描きだす。ダマスカスへの道であるから、人通りもあり、家屋も立て込んでいたことだろう。が、それら全ては消去され、馬とパウロとそして、手綱を引き締める馬丁が顔をのぞかせる簡素化された構図。それだ

けにパウロの回心と言う心理的なものにインパクトを集中できるよう意図されたのかも知れない。

この画のすぐ横に『聖ペテロの磔刑』がある。天国の鍵をイエスから引き継いだペテロは熱心な布教に勤めるが、彼らの活動に弾圧の手を緩めないローマ人に捕縛されてしまう。彼の最後は、「主と同じなのはおこがましい。せめて十字架には逆さに吊るしてほしい」と願ったと伝えられている。


サンタ・マリア・デル・ポポロ蔵

祭壇画のほぼ中央部、水平に近くペテロは十字架の上に釘でうちつけられている。その十字架を背負い、今まさに持ち上げようと背中、お尻そして手足を踏ん張っている処刑執行人のひとり。画面左手には十字架の足の部分をすべり落ちないように両手で押さえている別の執行人。そしてその部分にロープをかけ自分の背中をテコにして、十字架を垂直に立てようとしている三人目の執行人。あたかもすべての役者が自分の持ち役を最大限に体現した瞬間でもあるような構図。十字架の上のペテロはすっかり白髪となり、深く刻まれた額や頬のしわはその苦難のあとが忍ばれる。が、いまだ衰えを見せぬ白い頑強なからだ、鋭く見開いた眼にはまさに殉教者としての力強い物を感じさせ、観る者の心を強く打つ。そしてこの画家らしく、十字架の上にスポット・ライトが当てられ、ペテロの白いからだと白いローイン・クロスが目に痛々しいほどに輝いている。

このほかカラヴァッジョの画だけでも数か所存在する。祭壇画は黙示的な意味合いを多く含んでいるので丁寧に見ていると大変疲れてしまう。おかげでカップチーノ休憩の回数が増えた旅になってしまった。

サンチャゴ・デ・コンポステラと帆立貝

もう数年前の話になるが、日本にいる妹がサンチャゴに行ってみたいといってきた。それでは還暦のお祝いにと、安いフライトとレンタカーを手配し、妹に「悪いわ、悪いわ」を連発させて、私が「良いのよ、良いのよ」を連発しながら、主人兼運転手の３人で出発した。

中世以来キリスト教三大聖地の一つに数えられていたが、１９９０年代、フランスやスペイン北部からの巡礼路が世界遺産に登録され、以来人気の観光スポットになってしまった。ガイド・ブックでは、キリストの１２人の弟子の一人の聖ヤコブ（スペイン語：サンチャゴ）の遺骸がエルサレムから運ばれ、埋葬された墓がこの地で見つかり、そこに教会が建てられたとある。

急ぎの旅でもなかったので途中あちこちで道草を食ってしまった５日目、やっと目的地に近づく。最後の数キロは本当に歩いてみたいと言い出した妹に賛同し、「わが身に神のご利益が・・・」と欲張った。勝手なものでこんな時は車が邪魔になる。ドライバーには次の村で必ず待っていることを約束させ、過去一世紀、数え切れぬ巡礼者で踏み固められた道に一歩を踏み出す。「スペインでは雨は主に平野に降る・・・」と繰り返すイライザのセリフはウソで、もちろん山間部にも降る。案の上、途中から降りだした雨は傘をさしていても長時間のあいだに、じわじわと衣服を通し体の中に浸み込んできた。その上、妹が「トイレ」と言い、小さい声で「大」と添える。そんなものがこんな辺鄙な田舎道にあるはずはないとは思ったが、緊急を要したので比較的安全そうな草むらを見つけた。彼女は昔から何か興奮すると、「トイレ」と言う癖があった。もう孫まである身でもそれが変わらないのに驚くと共に、一瞬、子供の頃の懐かしい想いが蘇ってくる。頭の先から足の先まで雨でぬれそぼった体を引きずりながら、やっと待ち合わせの次の村に到着。我々のドライバーは湯気で曇ったガラス張りのカフェの中から、「遅かったねー」と云いながら、姿をあらわした。ずぶ濡れの２人の姿を見ても「傘、さしてたのでしょ」と全く同情なしの態度であったので、「苦難の雨道を歩む者のみに福（さいわい）は来りぬ」とうそぶく。

最初、大聖堂を目前にしたとき思わず「何、この教会！」と言ってしまった。この巨大なバロックの建物の正面には至る所に、ペンペン草ならぬ苔が生えていたからである。この地は霧が多くスペインでは最多雨地区であると聞いていたが、苔むす大聖堂に迎えられるとは、長い辛苦の巡礼の旅（？）の果てがこれかと少々がっかりした。しかし内部は違った。勿論、苔など一本も生えていない荘厳・壮麗そのもの。

中央タンパン部分はキリストを中心に、４人の福音記者が天国に迎えられている彫刻がほどこされ、正面奥の主祭壇には、使徒姿のヤコブ、巡礼のヤコブ、そして戦うヤコブと三変化する姿が彫られていた。この後ろの地下にはヤコブの墓があり聖遺品と共に祀られている。有名なボタフメイロ（大香炉）もこの傍に置かれ、汗と埃まみれの長旅であった巡礼者の“良いにおい”を和らげる役目をはたしているそうである。また長蛇の列をなしている免罪の門（聖なる門）もくぐり抜けたし、クリスチャンの妹がミサに加わったので、我々も神妙な顔で彼女に従った。何も分からないラテン語とスペイン語が妙に心にしみたのは何故だったのであろうか。

最後になったが、聖ヤコブを訪ねてのサンチャゴ巡礼の旅のシンボルは、帆立貝である。このシンボルマークは至る所で道標にも使われているし、また巡礼者もこれをブローチのように胸につけて歩いているのが見られた。話は少々横道にそれるが、「エマオの晩餐」（ロンドン・ナショナルギャラリー）でも客の一人が帆立貝を胸につけているのをカラヴァッジョは描いている。彼の選んだモデルの中にもサンチャゴ参りをしてきた人があったのだろう。

エルサレム、伝説の地

最初、この街を訪れた時はすっかり途方に暮れてしまった。すべてを２千年前にタイム・スリップさせ、私の貧弱な想像力をかき立たせねばならなかったからである。キリストが十字架を背負って歩かれたといわれる“悲しみの道”（ヴィア・ドロローサ）は両側にスークが立ち並び喧噪の巷があるのみ。ガイドによって、イエスが十字架の重みで最初に倒れた場所、嘆きの聖母に出会った場所、ヴェロニカがイエスの顔を拭いた場所、イエスが２度目に倒れた場所等が詳細に説明されたが、「はあ、そうですか」と言うものの、スークと人ごみの他は何も見えてこない。

処刑が行われたというゴルゴダは丘ではなく街の一角で、今はその後に聖墳基教会が建てられている。そしてそこではカソリック、ギリシャ正教、コプト、そしてアルメニアがそれぞれに教会の一部を占拠し、各々自派の儀式を執り行っている。キリストがこれをご覧になったらと、つい詮索したくなる有様である。十字架が建てられたと云われる穴も残っており、そこを一目見ようと長蛇の列。歴史家たちの調査では、聖書にあるゴルゴダの処刑地はここではなく、城壁の外に位置する、現在の「園の墓」と呼ばれるところがより確実性が高いそうだが、それでは我々が見た“十字架の穴”は一体何なのであろうか。とにかくこの教会は世界中から信者や訪問客が集まるさながら博物館のようであった。

逮捕の手が伸びていることを予知して、キリストが血の涙が出るような祈りをささげたと言われるゲッセマネの園を訪れた。今なおオリーブの木が生い茂っているが、その内の一本は樹齢 2,000 年以上と聞く。もし“物を言う木”であればキリストの祈る姿、お供の眠り込んでしまったペテロ、ヤコブ、ヨハネの弟子たち、ユダが先導したキリスト逮捕の一軍到着の話などを語ってくれたかもしれない。その他、マリアが水を汲んだと言われる井戸、洗い物をしたと言われる小さな流れ、だれだれが何々した場所、あれこれの奇跡が行われたところと、ガイドの説明は休むところがなかったが、しかしそれらを聞きながら、私は自分の貧しい想像力と戦うしかなかった。つい、子供の頃聞いた街中を行く救世軍のうた声、「信じる者は誰も皆救われん・・・」を思い出してしまった。

私は何故かイエスと言えば、２年前訪れたイタリア半島南端のマッテラ（Matera）の町を思い出す。初期キリスト教を彷彿とさせるような洞窟があり、いまだに町全体が聖書の中に出てきそうな雰囲気を漂わせている。町の外れには荒涼とした丘が続き、ここはメル・ギブソンの受難劇映画で磔刑の場面に使われたそうだ。聖書に記述された場面は、本や宗教画を通して我々の記憶の中で生き続き、それが映画やドラマとして再現されれば、時として**ほんもの**（？）以上に深い感動を与えるものになる。伝説とはうわさや風評に加え、その語り手や記録者の想像力も織り混ぜられた産物なのであろうが、それをわざわざ分析してその中から証明し得る事柄のみを探し出せば、この世の中、何とも殺伐としたものになってしまうのではないか・・・と思わずにはおれなかった旅になった。

ミケランジェロ・アントニオーニと
イングマル・ベルイマン

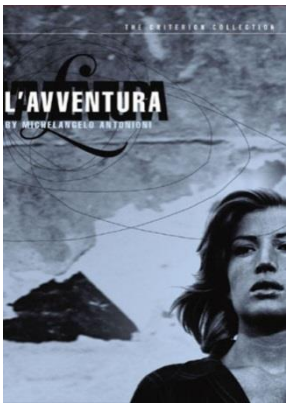
渡邉道英

映画ファンでこの二人の名前を知らない人はないでしょう。言わずと知れた２０世紀最大の映画監督と言われている巨匠たちです。丁度私が学生時代（１９６０～１９６４）に日本でもこの二人の作品の代表作が次々と上映され、私たち映画青年を虜にしてしまいました。以前『英国春秋』に投稿しました Iingmar　Bergman の代表作『野いちご』はスエーデンのものとあって、一般の映画館では取り上げることができず、当時「良質のアート系映画をより多くの人々に届けるという趣旨のもと設立された」ATG(アート・シアター・ギルド)で上映されたものでした。

ともあれ、ベルイマン監督は『不良少女モニカ』『第七の封印』（1957 第 10 回カンヌ国際映画祭審査員特別賞）『野いちご』（1962 第 8 回ベルリン国際映画祭金熊賞）『処女の泉』（1960 第３３回アカデミー賞　外国映画賞）はじめ『沈黙』『冬の光』『鏡の中にある如く』の三作品、いわゆる“神の沈黙三部作”と呼ばれる映画を次々に発表しました。

一方、Michelangelo Antonioni はフェディリコ・フェリーニやルキノ・ヴィスコンティなどと並んで、ネオレアリズモ以降のイタリア映画を代表する映画監督として知られていました。『愛と殺意』『女ともだち』『さすらい』に始まって、“愛の不毛三部作”と呼ばれた『情事』『夜』『太陽はひとりぼっち』は世界の若者たちに大歓迎され、時の世相までも変えてしまったと言われました。勿論これら名作は『女ともだち』（1955 ヴェネツィア国際映画祭で銀獅子賞）『さすらい』（1957 ロカルノ国際映画祭で金豹賞）『情事』（第 13 回カンヌ国際映画祭で審査員賞、英国映画協会サザーランド杯受賞）『夜』（1961 第 11 回ベルリン国際映画祭で金熊賞）『太陽はひとりぼっち』（1962 第 15 回カンヌ国際映画祭審査員特別賞）『赤い砂漠』（1964 第 25 回ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞）『欲望』（第 20 回カンヌ国際映画祭パルムドール賞）と世界三大映画祭を総なめにしました。

ところでアントニオーニ監督の『情事』は既存の映画文法とは全く異なる作品であり、カンヌ映画祭で



上映された際にはブーイングが鳴り止まなかったとのこと。国際映画祭とは映画という商品を売買する市場でもあるので、国を代表するバイヤーにとって映画祭会場は真剣勝負であったはず。“こんな映画では観客動員ができない”と『情事』の事を商業主義の観点から判断しても当然でありましょう。

同じような事がベルイマンの映画にも言えることです。『第七の封印』『沈黙』のような、形而上学的とも言えるような難解なテーマの映画をお金を出して映画館にまで出向くだろうか？否である。映画監督は創造者であって、芸術家、思想家として自らの考えを映像で持って表現することは当然のことです。従って何人と雖も映画監督に対し、制限を加えたり、強制することなどできません。しかし、一般的な映画はプロデューサーはじめ映画製作者側が莫大な制作費を用意して、理想とする映画作品を製作します。そして再生産も考えて資金回収＋利益の実現を追求します。其のためにも沢山の観客にチケットを購入してもらって、其の映画を見てもらうことに邁進します。そのためにも、どのように難解なテーマでも“映像言語”の力を信じて解りやすく表現する事が大切であり、重要な事ではありますまいか！？

さて、アントニオーニとベルイマンの作品を見て、何時も感じたのが見終わった後の感想でした。映画研究会の仲間達と議論した際、共に意見が合致したのはアントニオーニには救いが無く、ベルイマンには救いが有ると言う事だった。５０年後の見方はどうか、二人の巨匠の映画を見直してみたいと思っています。

最近、判った事ですが、ミケランジェロ・アントニオーニは２００７年７月３０日ローマにて９４歳で逝去。イングマル・ベルイマンも同じ日（2007 年７月３０日）、フォーロー島（ゴトランド島の北の島）にて逝去されていました。８９歳でした。（合掌）

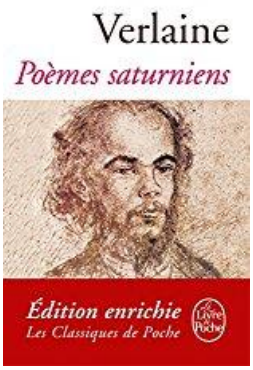
私の憧憬して止まない詩

松尾　オハロラン　美和子

「秋の日の　ヴィオロンのため息の　ひたぶるに身に沁みてうら悲し
　鐘の音に胸ふたぎ　色かえて　涙ぐむ　過ぎし日の思い出や
　げにわれは　うらぶれて　ここかしこ定めなく　とび散らう落ち葉かな」
フランス詩人ポール・ヴェルレーヌのこの絶唱、「秋の歌」に私が出合ったのは確か高３の時、学校の図書館であったと思う。それまで小説は貪り読んでいたが詩には興味がなかった。しかしこの詩にすっかり魅了されて手帳に記し何度も何度も読み返していた記憶がある。

時は過ぎ何年も後に私はパリのソルボンヌで或るコースを学んでいたとき(主としてフランス文学）ひとりの講師の先生がある時この詩を朗読してくださった。先生の声の色合い、行間の間、旋律ある時は憂いに満ちており、ある時はささやくようにそれが微妙にあいまっていて私はすっかり陶酔してしまった。さっそく言われたとおりに原文を繰り返して読んでみた。そして上田敏の訳は素晴らしく原文を的確に表現していると思った。堀口大学、鈴木信太郎、山口義男などの訳も読んでみたが、私は上田敏の訳が原文の持つあの情感をあますことなく表現していると感服している。詩の最後のくだり「げにわれは　うらぶれて　ここかしこ定めなく　とび散らう落ち葉かな」はまさに彼の生涯の最後の様子、施療病院を転々としたあげく窮乏のなかで死んでいった彼を表現しているではないか！！でも彼がこの詩を書いたのは弱冠２０才の時だというに。

その後、私はヴェルレーヌの詩を読み漁り彼の伝記に興味をもった。彼は酔いどれ、放浪癖、凶暴で妻や母親に暴力をふるい、最高の友人ランボーと二人での放浪の旅の途中で、彼にピストルを発射して傷つけ禁固２年の刑に服したとんでもない性格の持ち主であることに驚嘆した。あの繊細でロマンチズムに溢れた独特の雰囲気をかもしだす詩人は天使と悪魔みたいな二重人格ではないか。妻子が去って行ったのもわかるような気がする。彼の有名な詩のひとつ、
「都に雨が降るごとく　わが心にも涙降る」で始まるこの詩。ランボーを撃ってしまった痛烈な悔恨に心を締めつかれるような詩で、服役中に目覚めた宗教的な彼のある面を示している。この詩にも私は心を打たれてやまない。



ヴェルレーヌはランボー（１７才の天才詩人との放浪生活の中でランボーが常に傍にいて影響を与えたことによってヴェルレーヌの詩法は思考の中で徐々に構成されたといわれている。この天才詩人との巡り合わせによって初めて完全な輝きを発したのであるといわれている。文学的影響は詩人ヴェルレーヌから少年ランボーへ及んだのではなく全くその逆であった。ランボーが彼に新しい思考と感覚の世界を開き宇宙の底を独特の視覚によって見透す方法を強要したのであったとい
ではいったい天才詩人ランボーとはどんな人物であったのだろうか？　彼は１６才にして第一級の詩を生み出し数年のうちに他の文学者の一生にも比すべき文学的燃焼をなしとげたと言われている。彼の散文詩「地獄の季節」は彼が古い文学にたたきつけた絶縁状だと言われている。するどい直感と幻想力で新しい言語こくしの方法を創造した、かってなかった詩的戦慄の創造者！　彼は１９才でヴェルレーヌとの友情が破綻に終るとともに文学と絶縁して放浪の旅に出て若くして亡くなった痛々しい詩人である。ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボー、マラルメ達の象徴主義の詩法はそれまでの古い詩法を完全に破ったのだ。

私は若いときはフランス文学に熱中していたが、後年ロンドンに住むようになって始めてイギリスの詩にも興味を持つようになった。大好きな詩人はジョンキーツ、コールリッジである。ジョンキーツの“ナイチンゲールのうた”は返して読んでも飽きない。

彼が住んでいたハムステッドにある家には数回行ってみた。このあたりは昔は多分ずうっと田舎でありナイチンゲールのさえずる声も聞けたのであろう。とうとう私はこの詩を想像するままに描くことにし大樹の下でナイチンゲールのさえずる声に身も心も陶酔している詩人の様子を思うがままにキャンバスの上に油絵で描き上げた。写実的ではなくそうかといって抽象画でもない。

同じくコールリッジの「クーブラカーン」（Kubra Khan）もひどく魅了されてしまった。モンゴルのジンギスカンの孫にあたるフビライハンの歓楽宮とその下を流れる川辺でダルシモアを奏でながら歌うアビシニアの乙女の美しい詩で私はこれも想像するままに油絵で仕上げた。

二つとも私の第一回目か二回目の展覧会に（もう５～６年前になるが）非買の札をつけて出した。今では二つともニューカッスルに住む娘夫妻の家の居間に飾られていて私は満足している。同じくコールリッジの「老水夫行」も気に入っていて４点のシリーズで描いた。これは私の寝室に飾っているがまだ展覧会にはだしていない。

その後エミリーブロンテの「嵐が丘」とか、ハーデイの「テス」とか、ワイルドの「サロメ」とか色々と楽しみながら思うままに独自の想像で描いてみたが、どれも満足できる絵には程遠いのだけど毎日楽しみながら描いた。

だがヴェルレーヌの「秋の歌」は描く自信が全くない。あの細やかで繊細な憂いに満ちた微妙な雰囲気をもつ詩を私が生意気にも描いたら壊れそうで怖くて手も足もでないのである。いつの日か私の感性がもっと鋭く研ぎ澄まされるようになれば、やってみたいと夢見ている次第である。

ヴェルレーヌ（１８４４～１９３６）ランボー（１８５４～１８９１）
ジョンキーツ（１７９５～１８２１）コールリッジ（１７７２～１８３４）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

英国春秋あれこれ

Kubla Khan

Samuel T. Coleridge

In Xanadu did Kubla Khan
A stately pleasure-dome decree：
Where Alph, the sacred river, ran
Through caverns measureless to man
　　Down to a sunless sea.
So twice five miles of fertile ground
With walls and towers were girdled round：
And there were gardens bright with sinuous rills,
Where blossomed many an incense-bearing tree；
And here were forests ancient as the hills,
Enfolding sunny spots of greenery.

英国春秋俳壇

雛子クーパー

春愁い

清明や一人住まいに慣れゆきて

悩みごと一つほどけり桜草

思われて出方に迷う花曇り

のどけしや愛想よろしきカフェの主

云いつのる真実重し春愁い

許しすぎ元に戻れぬ青嵐

小満や昔の恋も身内めき

冬もやの庭を巡りてひとりかな

秋の園寄りかゝりたき大樹あり

立春や猫に守られ今日も無事

英国春秋俳壇

俳句同好会

立春や曙の空白めきて　日出美バンダースケイフ

春の空道祖神までそわそわし　悦子キング

春浅し厚手のコート変えやらず　田口邦子

如月や春の空にも粉雪舞ひ　藤原さかえ

茅吹つつ雲の多かり春の空　葉子デニヤ

秋時雨静かに川面をなぜながら　宣美ロビンス

啓蟄や出あさる烏我を無視　上田陽子

広がりて春を告げおり黄水仙　福重久子

子と歩むおぼろおぼろな宵の空　松尾美和子

雨上がり春の空には光満ち　西脇ゆう子

春の空待ちわびつつも尚雨天　タミーガフニー

入れ替えて軽く羽織れる春衣　千津子ウインター

日の光小鳥たわむる春の空　藤田幸子

秋風にゆれるスカーフほゝを撫で　富美子マスィー

俳句を学ぶ会もこの三月で四年目を迎えます
皆大分熱が入って参りました

焼き鳥屋修業

早乙女健之

焼き鳥、焼きそば、ラーメン、餃子、そうみんなＢ級グルメ。そんなグルメが私の趣向なのだ。そうゆうメニューにとても親しみやすいのだ。私の口に合うからだ。そうゆう育ちなのだろう。一般的な料理本には、Ｂ級グルメを詳細に掲載していることはとても少ないのである。我々が一番親しんでいる、これらの庶民的な食べ物がなぜもっと料理本で取り扱いされていないのだろうか。私は庶民的な雰囲気のある焼き鳥屋が好きなのだ。銀座の高級な焼き鳥屋のような所じゃなくて、下町やガード下の焼き鳥屋で焼き鳥と漬物をつまみながら酎ハイや安酒、夢追い酒をかたむけて友達とのお喋り、これが何よりの楽しみである。安給料のサラリーマンが会社の接待費じゃなくて誰にも気がねすることなく、自腹で心おきなくひと時を過ごせる処がいいのである。

私は焼き鳥屋で修行しました。どうして？ただただ単純に安易に焼き鳥やなら、誰にでもすぐに出来ると思ったからである。鶏肉を竹串にさして、炭火で焼いてたれをつけてお客に出す。すぐに店を出して焼き鳥屋になれると思ったからだ。一介のサラリーマンで一生を送るもよし、自分の力量を出して経営者になるのもよし、芸術家になるのもよしと思い、自分にできるのは、焼き鳥屋ではどうかと単純に思ったからである。それじゃどこかで焼き鳥を学ばなければと思っていたとき、妻の友人（英語の先生）の生徒さんが焼き鳥屋をやっていることを知り、その友人の紹介でその生徒さんの焼き鳥屋での修行がはじまった。無償で働きますので焼き鳥のすべてを学びたいとお願いをいたしました。私の先生（ふぐの調理師で以前は焼き鳥とふぐを店で出していた）について一年間手習いをしました。とは言っても私は一介のサラリーマンでしたので、毎週土曜日の午後４時から１１時頃まで夕食付でした。この夕食は毎回とてもおいしい食事でした。私だけの特別メニュー、純日本式でハマグリの澄まし汁、漬物、焼き魚、等々毎回楽しみだった。

我が先生の焼き鳥店はカウンターに１０人、座敷に４０－５０人の店でした。先生は一番最初に、「早乙女君、このカウンターの内側と外側（お客様）とでは別世界である」と教えてくださいました。外側のお客はお金を払い、エンジョイする側、内側はお客様に満足してもらい、その報酬を頂く側、先生の説得力ある話に、ああその通りだと改めて思った。私の初めての修行は櫛刺しでした。焼き鳥屋の材料のなかで安価なものは鳥皮でした。半解凍された鳥皮で先生が見本を見せながら、こうして鳥皮を切ってこう刺すんだと教えてくれた。焼き鳥の皮の重さは３０g、形は扇子型（つまり先に重量感のある大きさの物）。私は見よう見まねで櫛刺しをやった。時間もかかり、たびたび竹ぐしで指をさしてしまったりしたが、プラスターをはり何とか数本完成。しかし我が先生は厳しかったです。先ず竹串に刺した鳥皮の形がだめ、重さがまちまち。何度かやり直すうちに鳥皮が穴だらけで解けて、くし刺しができなくなってしまった。勿論、その鳥皮は廃棄処分。こんなはずではなかったのに。先生はハカリを私の横に置き、一本一本チェック、先生の店では毎日４００－５００本作らなければなりません。先生のさした物、ハカリに乗せると、みんな同じ重さ、形も同じ。私、ばらばら。私が２，３本くし刺しをするうちに先生は２０－３０本刺していた。一本１ｇちがっても３００本では３００ｇ（皮の場合は一本３０ｇですので１ｇ違うと１０本違ってきます。）そうです、毎日１０－２０本ずつちがってくるのである。そんな修行をするうちに何とか形が良くなりはじめ、ハカリを使わずに重さが少しわかるようになってきた。

焼き鳥のタレの作り方も学んだ。　水、醤油、砂糖（白砂糖、ザラメ等々）が基本。　そしてそのあとは各焼き鳥屋の秘蔵のものだそうです。味醂、酒や玉ねぎやネギを焼いて一緒に煮込んだり、ニンニク、ショウガ等々を入れたり。中にはトロミを出すため片栗粉を使用している店もあった。店のタレは、焼いた肉汁が入りうま味が増してくるのです。タレは量が少なくなると新しいタレをつぎたします。勿論タレは数日に一回火を通します。

また、自家製ソーセージの作り方も学んだ。豚の切り下ろし肉（こま切れ肉）をまな板にのせ、出刃包

丁で、細かくたたき切り、香料、焼酎を混ぜ粘り気がでるまでよくコネ合わせて、一晩ねかせて熟成させ、羊の腸（Sheep casing）に詰め、７０度の湯で３０分ゆでて、さましてから、冷凍庫に保管・・・等々。お客様に出す時は焼き鳥と同じ様に櫛に刺して焼き上げる。マスタードを添えたこのソーセージは実に美味い。その後私は何度か自宅でソーセージを作った。友人に差し入れしたら、すごく喜んでくれた。

ある時は牛豚のトサツ場、電気ショックで成仏させていた。そこにいた動物たちはさすが動物の感なのか、他の動物の死の臭いなのか、自分たちがトサツされる事を察してか、動物たちは独特の唸り声のような鳴き声をだしていた。今思いだしても気分が悪くなる。豚のレバーなどは、水のはった大きなドラム缶にとりたてのレバーがザブンと入れ出しされて水は真っ赤、これが本当の血染め色。ああ、このレバーの一部分が店でレバー刺しになるのかと思い、あまりのショックの為、数日気持ちが悪かった。
またある日は豚の内臓専門店では豚の大腸小腸等が上から吊下げられていた。他の臓器も販売されていました。こうゆう店があるとは・・・知らなかった、私は。この大腸を湯がき、カットされて櫛にさして“しろ”として焼き鳥屋に登場するのだ。

燗酒（人肌、熱燗、ひれ酒）等の入れ方、ビールジョッキーを冷やしておくこと、またお客が徳利に残した酒は取って置き、煮物に使用すること等々いろいろと学びました。私たちが櫛刺しをしている間、店の掃除をする人がきて、座敷やトイレの掃除をしにきた。私は時々接客係の人と一緒に座敷の各々テーブルに座布団をならべたり、小物（醤油、辛子等）をセットして、打ち水をして、お客を迎える準備をした。開店前には勿論先生と私は白い帽子をかぶり白いエプロンをきっちり絞めてお客を迎えた。先生はカウンターで焼き鳥、他の人たちが、料理、お客接待、注文等を取ってしていました。

約半年が過ぎたころには、何とかくし刺しができるようになり、暇なときに先生が、私に焼き鳥を焼くようにと言われ、焼かせてもらいました。最初は竹串が焼け、鶏肉を焼き台に落としてしまったり、肉が炭みたいになったり､煙で肉が黒くなってしまったり･･･､簡単そうに思っていた焼き鳥でしたが･･･、そうです、火加減を調整したり、火力をうちわでおさえ焦がさないようにしたり、煙を抑えて肉が黒くならないようにしたりするのです。どうにか焼き鳥が焼けるようになり、私の焼いた鶏肉と先生が焼いたものとの焼き具合、味の比較をし始めました。その後、すこしずつうまくなり、私はたまに、お客さまように焼き鳥を焼き始めました。もたもたして焼いていました。忙しくなるとすぐに、先生が代わって焼きはじめました。

雨の日などはお客の入りが悪く、先生は早々と店を閉じ、これから焼き鳥屋見学修行と称して、私をつれだし、他の焼き鳥屋のはしご試食兼勉強会を何度かやりました。ビールや酒をのみながら、この店の焼き鳥の櫛の刺し方、形、味、タレ、器、盛り付け、特に変わったメニューなどを注文したり、店員の気配り、店の雰囲気、Location 等々。勿論すべての経費は先生負担でした。

一年後、私は Vancouver に行き焼き鳥屋出店のための Fundamental research に出かけた。カナダにはまだ焼き鳥屋はないと思ったからだ。Competitors のいない所と思ってのことだ。実際に行ってみたら、なんと、どの日本食レストランも三種の神器（寿司、天ぷら、焼き鳥）よろしく、これらを Main に売り物にしているではないか。　なぜ B 級グルメの焼き鳥がここでは Main の一角に格上げされ、提供されているのか。本場の日本の和食レストランで焼き鳥をだしていた・・・？？　和食の焼き物といえば魚なのに・・・、ああ Demand があるのは解ったが、これじゃ焼き鳥専門店をだしても今の私には難しいと思った。それに資金不足では・・・。

私は鐙摺港（あぶずりー葉山マリーナのとなり）でヨット遊びをしていました。夏になると、恒例で毎年横須賀の孤児院の子供たちをヨットに招待して船に乗せ、その後ヨットハーバーで焼き鳥、焼きそば等をみんなで食べるのが恒例になっていました。勿論私は前日から焼き鳥の準備、当日はヨットに乗らず、朝から焼き鳥を焼きはじめ、みんなが帰って来るまえにすくなくとも１００－１５０本の焼き鳥を準備していました。なにせ、セーリングのあと約７０－８０人の人々が一斉に食べ始めるからである。

ここでは　毎回５００－６００本を焼いていました。

ロンドンに来てからは我が子が通っていた小学校で４－５年やはり焼き鳥をやきました。
学校が鳥肉を買い、鳥肉以外はすべて私のドネーション。一日前には焼き鳥のタレの仕込み、鶏肉のくし刺し、等々。当日はその学校の校庭内で焼き鳥を焼きました。３本 £1.00　数百本の焼き鳥が飛ぶようにうれました。焼くのが追いつきませんでした。こちらでは鳥皮はたべないのか、当時鳥皮を提供している店はどこにもありませんでしたが、私は湯がいた鳥皮を焼き、タレをつけて無料でみんなに提供したら、美味しい、美味しいいと言ってあっという間にすべてなくなりました。すべての売り上げ金は学校に渡しました。勿論学校は利益をあげましたよ。

また我が家の近くの日経企業の本社でも同じ様に一度焼き鳥をやりました。約１０００本のくし刺しが間に合わず、その会社の方が櫛刺しの手伝いにきてくれました。当日その会社で焼き鳥をしました。いつものように１００本ぐらいは事前に焼いておき、みなさんが来はじめた最初の一時間ぐらいは良かったのですが、いつの間にか焼くのが追いつかず、長蛇の列、隣で油で揚げ物をしていた方が、見かねて、油で櫛刺しの鶏肉をあげてしまった。私も一緒になり残りの２００－３００本、焼き鳥なりならぬ、櫛鳥の素揚げ。それでもみんな食欲旺盛なのか、その櫛鳥の素揚げがあっという間に売り切れた。その会社の方々とその家族のみなさんが２００－３００人いましたので本当に滅茶苦茶でした。

あれから何十年、人生いろいろ、計画通りにいかないのが人の世なのか。さまざまに変化していくのがこの世の常なのか。未だ焼き鳥屋の開業ならず。いいじゃないか、昔の思い出に花をさかせて今日も夢追い酒で乾杯するのも。そう俗世界の極楽とんぼで・・・。

英国春秋あれこれ

赤い靴

近頃赤いスニーカーを履いた男性を良く見かける。「赤い靴なんて女の子の物」との思いを裏切って、中々恰好がいいし、また良く似合っている。もっとも彼らはスポーティな若い男性だからかもしれない。
それと香水を含め化粧品、装身具、美容専用下着など男性専科の商品が市場に溢れている。勿論、それらに関心が深まり、購入する男性が増えたからで、まさか女性からのプレゼント用に取り揃えられているのではないはず。靴は別として、さすがに街中で赤い背広とかコートを着ている人は見かけない。が、チェルシーにある退役軍人たちのロイヤル・ホスピタルのユニフォームは赤色である。若者と呼ばれる年齢はとっくに過ぎてはいるが、中々恰好は良く、威厳に満ちている。もっとも彼らの靴は黒一色で赤ではない。

赤いスニーカーが冒頭に出てきたが、「赤い靴」と云えばまず第一に童謡『赤い靴』を思い出す。

赤い靴　はいてた　女の子　異人さんに　つれられて　行っちゃった
横浜の　埠頭(はとば)から　汽船(ふね)に乗って　異人さんに　つれられて　行っちゃった
今では　青い目に　なっちゃって　異人さんの　お国に　いるんだろう

赤い靴　見るたびに　考える　異人さんに　逢うたび　考える　　（野口雨情作詞）

子供の頃、口にした歌だが、良く考えてみると、なんとも怖い内容である。まさか「山椒大夫」のような“人買い”にではないだろうが、遠く異国に連れ去られるとは哀れな気がする。この歌に愛着があるのは、子供心に何となく物悲しい思いを感じていたのかもしれない。今、“人買い”と言う言葉を使ったが、現在は死語になってしまった。「云う事を聞かないと、**人さらい**（人買い）に連れて行ってもらいますよ！」とは親たちが叱責の言葉に使ったものだが、最近の子供たちはこんな言葉では騙されない。
“怖い（ヘンな）オジさん達”が自分の子供たちに何かしないかと、親の方が戦々恐々としている。

「赤い靴」と云えば、モイラ・シアラー主演の映画『赤い靴』も忘れられない。昔、原作のアンデルセン童話を読んだ気もするが、筋はほとんど覚えていない。映画の方は断片的だが覚えている。
恋人をとるか踊りをとるかと迫られ、苦悩の末にそのどちらでもない“死”を選んでしまうヒロイン。恋も仕事（芸術）も両建てにしている人が多い世の中であるが、それが出来ない不器用人間にもまた魅力を感じてしまう。映画だからドラマ性を強調して“自らの命を絶つ”ことにしてあるのだろうが、“器用さ”には何かうさん臭い物を感じてしまうのはどういう心理であるのだろう。

童話『赤い靴』の結末はうろ覚えであるが、“神様の登場”であったような気がする。それでは映画でのヒロインも、恋人かバレーかだけではなく、神のチョイスもあったのかも。しかしこの映画の終幕が“尼僧院への逃避”だったら、あのように名画として多くの称賛を受けることもなく、ましてや映画の興業成績も上がらなかったかも知れない。

『英国春秋』　２０１７年春号　（No.３０）

編集人　小川のり子
発行人　佐野圭作
発行所　英国日本人会
事務局　c/o JEIB
3 London Wall Buildings
London EC2M 5PD
原稿の送り先　ogawa@japanassociation.org.uk　or
Mrs M Hodgson 492 Canterbury Way, Herts.SG1 4ED